

北米インディアンの生活 (3)

—23 部族の伝承と習慣—

エルシー・クルーズ・パーソンズ 編 著

神 徳 昭 甫 訳

V-4 タルサ¹⁾のトクルキ

トクルキは現在のアラバマ州中央部にあるタルサのマスコギ族²⁾の町で生まれた。その辺りの先住民の赤ん坊はすべてそうなのだが、彼も母親の家からかなり離れた藪の中に隔離された産所でこの世の最初の光を見たのである。というのは、彼が母親の家で生まれると、家族全員に不幸が降り掛かると信じられていたからであった。トクルキという名前は、タルサ^{ウインド・クラン}の風一門に属し、「走る二人の人」という意味である。この名前を最初にもらった人が生まれたとき、父親は出征して不在だったが、そのとき敵の斥候二人を威嚇した。あまりにもおびえて、連中は手に持った武器を捨てて慌てふためいて逃げだした。新生児が再びこの名前を貰ったのは、この事件を記念してであった。

トクルキの母親はこの出産のため隔離されている間、実の母親とほかにもう一人、産婆の技術にかけては一門でもっとも評判のよい老婆に介護されていた。もう秋も遅い時分だったが、この老婆は生まれたばかりの赤ん坊をすぐさま川岸に運び、冷たい水に漬けたあとで、次は落ちないようにと、樹皮で作った紐を赤ん坊の両肩、両腿に括り付けて、籐製の揺り籠の中に寝かせたのである。トクルキのこの世での最初の数ヶ月は、こうしてときには母の背に負われ、またときには母が家事で忙しい合間など、小屋の羽目板に背を立てかけられたりしながら、この産所で過ぎていったのである。しかし、彼が寝かされているときに限って、この揺り籠には特別に豹の毛皮で覆うことが許された。それというのも、父も伯父たちもそろって著名な戦士であったからで、この子もまた、やがては彼らの跡を継いで立派な勇士になることが期待されたからである。従って彼は好戦的な気質と大胆で勇猛な精神を、その身に纏っているはずなのであった。

トクルキは、その人生体験がもっぱら自分に食事と暖を与えてくれる、ある保護者（それは母親なのだが）、さらには何かおぼろで暗いものが、その中でうごめいている明るい物体、も

しくは明るいものが、その中でうごめいている何か暗い物体——だけに限局される、そういう時期を通過したのである。前者の、彼が絶えず目にする、ある特別に明るい物体とは小屋の扉だと後でわかった。また後者は、夜中に目覚めたときに目に入る、赤く熱した物体で、つまり、暖炉の火にほかならなかったのである。

こうして次第に彼の意識が目覚めてきたこの家は、家族が冬の間に住む小屋であった。外枠はヒッコリーの柱を、おそらくは直径 25 フィート位になろうか、環状に並べ、その尖ったそれぞれの先端を括り合わせ、さらには中心の四本の柱に結んで支えられる。この間を細くて、よくしなる柔らかい木の破片で繋ぎ合わせ、乾し草を混ぜた泥を厚く、漆喰のように塗る。出来上がった小屋の全体は裏も表も葦草で覆われる。床は外の地面より、2, 3 フィートも低くうがたれているが、小屋のすぐ後ろに浅い暫壕を周囲に張り巡らして水の侵入を防ぐようになっている。最初にトクルキの注意を引き付けた戸口は東にあり、朝日が入り込むところである。しかし、生まれたばかりの子どもを除いては、それで目を覚ますということはめったになかった。というのは、お祭り騒ぎか、何かの儀式のあるとき以外は、一日の仕事はごく早朝から始まり、すぐに終わったからである。煙穴がないので、ときどき白人にとっては耐え難いほどの煙が小屋の中に充満することがあったが、しかし、当を得た木材の選択によって少しはこの欠点が是正されている。つまり、すこしの煙で隙間が出来る、樫やヒッコリーの古材を使用し、さらには赤々と薪を焼べて、その残り火が夜の間に長く、熱を放出するよう工夫されているからである。壁の周りには、床から高さ 1 フィート半から 2 フィートに達するほど、^{むしろ}蓆が間断なく敷きつめられ、その上に熊皮を覆い、家族のほとんど全員がその上で寝た。

家族は、トクルキの両親と、兄、姉が一人ずつ、母親の母、母の既婚の姉妹が一人、その夫と二人の子ども、母の弟、それから家族とはそれほど近い間柄ではないが、この家を一時的に自分の住まいにしている風一門の老人が一人、という構成であった。トクルキの生活において、これらの人々よりもっと大切なのは、すこし離れたところに住んでいるが、しばしばこの家を訪れる一人の老人である。英語では「母方の叔父」^{マターナル・アンクル}と呼んでいるが、この人はトクルキやその兄弟姉妹、さらには母親の姉妹の子どもたちの叔父であるばかりか、そのほか大勢の、ほとんど親戚とも言えない子どもたちにとっても「叔父」なのであった。しかし、成長するにつれて、トクルキはこれらの人たちも、「兄」、「弟」、「姉」などと呼ぶようになったし、また彼らの大部分は、自分と同じく風一門と呼ばれているが、時には、スカンク一門とか、魚一門などと呼ばれることもある、ということを知った。

母はトクルキをまだ背^{せな}におんぶしているときから、毎朝川に連れて行き、頭から冷たい水をかぶせ自分も水浸しになった。彼の最も早い記憶は、暖かい夜の休息のあとの、この冷たい水浴びのことにほかならない。ごく少数の病人や年寄りを除いて、村中のほとんどすべての人がこの朝の水浴を欠かさず、成人の男子や少年たちは、ザンプとばかりに流れに飛び込んだし、

女たちや子どもたちも負けじと寒空のもとで水しぶきをあげては楽しんだものである。

このならわしを誰か免れるものがないように見張っているのが、いわゆる「叔父さん」の役目だった。この人はいつも川辺にいて若い少年たちを励まし、臆病者は叱りつけ、それでもなお言いつけに従わないものは、ときには硬い棒を振るって懲らしめた。この「おしおき」の最中もいろいろと役に立つ「教訓」を違反者の耳から注ぎ込んで矯正に務めたので、トクルキはこの「叔父さん」こそ、困ったときには真っ先に頼りにしなければならない人であること、またこの人の承認を得ることがなにより大事であり、この人の不興を買うことはなんとしても避けなければならないことを知ったのである。冬の夜なぞよく、叔父さんは「甥」っ子や「姪」っ子を集めて教育したが、特に先祖の偉業の数々を、ときには小さな紐やビーズの助けを借りたり、またときには棒に切り込んだ刻み目を参考にしながら記憶を呼び起こして子どもたちに語り聞かせたのであった。しかし、老人たちが集まって話し合っているとき、トクルキの母は決して彼がその談合の側に近寄ったりすることを許さなかった。好奇心に負けてつい、この禁を犯したときは、げんこで耳をひどくぶたれたりした。後に彼は自分のこの行為は年長者に対する敬意が欠けていたから、あるいはそのために彼らが腹を立てたというのではなく、老人は超自然的な魔力を持っているから、そばに近寄りすぎた子どもは魔法にかけられてしまうかもしれない、というおそれがあったことを知ったのだ。しかし、こんな誘惑は冬以外は起こりそうになかった。というのはほかの季節なら、老人たちは若者から離れたところで働いたり、話し合ったりするからであり、たいていは広場によく集まった。この「広場」は長じるに従って次第にトクルキの生活の中で大きさを増してきた。彼の家からはほんの少し離れたところにあったからである。中で遊ぶことは許されなかったが、その周囲を歩くことはできた。そこはいろんな儀式的に行われるところで表面を削って取った土を一段と高く盛り上げた部分が境界であることが知れた。西端近くに泥を塗り固めて出来た四つの長くて細長い建物が立っており、それらの隅っこの入口は広場の空間を限る外枠となっていた。いずれも戸は空け放たれており、内部は壁——しかし、それは天井までに達していない——に仕切られて四つの同じ大きさの部屋に分割されている。西側の小屋のまん中の部屋だけが多少ほかの部屋と異なり、その後部が壁と平行のさらにもう一つの壁によって区切られ、構造的に狭い上にしっかりと戸締まりがなされているのだが、トクルキはここに儀式で使う土瓶や、ガラガラ、太鼓、乾燥させた薬草、そのほかこの部族の最も神聖な財産が蔵われているのを知っていた。前部にはこの集落の首長、つまりミコとその主だった顧問たちの座席があった。この広場の北西の外れに大きく見えるのはツホコファ（室内会議所）で、冬季用の家とそっくり——こちらがずっと大きいところが違うが——に造られている。東の方は広々とした空き地が残され、ときたま鋤を入れられ、また大勢の人の足に踏まれて草の生えない地面を保っているのだ。中央に球技用の柱が聳え、また両端には二本の短い柱が立っていて、ここで戦争のあと捕虜として連れてこられる敵の部族員

が火あぶりの刑を受けるのである。トクルキはほとんど毎朝、この町の偉い人たちがこの広場に集まっているところを観察しているし、これらの建物の中で薬草運びがアシ（トキワガシを嚙んで吐き出した注入液）を巻貝に容れて持ち運び、顧問をもてなしているところを目撃している。彼らは心身ともに清潔にしてこれから行う会議に臨めるよう、胃の中にあるものはすべて直ちに吐き出さなければならないからだ。トクルキは母が薪を探しに森に行くとき供をすることもたびたびだったし、母や祖母、それから家族のほかの女たちが農作業をしているあいだはよく畑の端に腰を下ろし、またときには鴉を追い払うような時間のかからない、楽な仕事を言いつかることもあった。この畑には主にカボチャや豆が植えられて、トウモロコシはその大部分が、この村からかなり離れた町場にある、大きな畑に植えられた。春ともなれば、ミコに先導された全村民が、ヒッコリーの木でこしらえた鋤を肩に担いでそこへ行き、種を蒔く前に地面を耕すのである。各家庭は僅かな草地によって間を仕切られた、それぞれの園芸用の畑をここに持っていたが、仕事はみな共同で行った。最初はだれその畑、次はほかの誰かのところ、という具合に順に全員の畑を耕やしていったのである。そのあと、雑草を引き抜いたり、鳥を追い払ったりするのは専ら女・子供の仕事だった。その畑の側には見張り用の小さな番小屋が設けられていた。全員が総出で働くこんな日は、仕事の日であると同時に、たぶんに祝日のようなところがあった。朝早くから始まって正午を少し回ったところで仕事は終わった。それから全員共同の食事を摂り、そのあとは球技大会、さらに広場に燃やした大きな焚火——これに松明の灯がともされて一層明るさを増した——を囲んで踊りが行われるのが恒例であった。

球技試合は広場にある柱ではないが、たいてい一本の柱の周りで行われた。これは男女が二手に分かれ競い合うもので、女は両手でボールを投げるが、男は棒を使う。得点は柱に記した目印の上にボールを当てれば1点が刻まれるものだが、もし柱の先に止まっている木彫りの鳥に触れれば5点が数えられる。しかし、男だけでちょうどラクROSS³⁾によく似た試合をやることもある。もっともラクROSSは大きな棒一本使うが、こちらは二本の短い棒を使うという違いはある。これは敵味方が2, 3フィート離して立てた二本のまっすぐな棒によってそれと分かる、それぞれの陣地にボールを入れることによって競い合うもので、一試合は20点取った方が勝ち、双方の記録者がそれぞれ1点取るごとに1本の棒を地面に突き立てて行き、10本に達すればまたそれから順に抜いて行くものである。風、熊、鳥、ビーヴァー、それから全体で白い人と呼ばれる別の一門が、アライグマ、狐、ポテト、鰐、鹿、それと言葉の違う人々として知られている一門と、それぞれ敵・味方に分かれて対抗した。しかしこれらの試合は、ただの練習試合、もしくは模擬試合というべきものに過ぎないが、町同士でしょっちゅう行われる定期戦こそ、本物の真剣勝負の試合であって、このとき人々はそれこそ戦陣に赴くときのような用意周到さと、儀礼的なものものしさをもって戦うのである。試合に先だっては十分な下準備がある。つまり、選手は断食をし、淡水魚の菌で体中をひっかけ、さらにまじない師を

雇って超自然的存在の助けを祈願する。約束の場所へはまるで仇敵と対戦するかのように行進して行くし、またその試合の結果にたくさんの財産を賭け、ときには重傷を負う者もかなり出るほど激しく行われる。

冬になると、トクルキの母親や他の女たちは籠や蓆づくりに精を出し、またバイソン⁴の毛皮をねじ曲げて脛当の長靴下をつくったり、マルベリーの樹皮の内側でマント——女のみが着る——を編むのに忙しい。夏の間彼女らは陶器づくりや馬の毛を梳いたりするし、食物の準備に忙しい——もちろんこれは四季を通じて変わらないのだが。女性はまだ木臼でトゥモロコシを搗いて粉を自分で準備しなければならないが、ときどき二人ずつ、二手に分かれてこれを行うことがある。ときにはまた、彼女らはこの労働のつらさを十分軽減できるとおもわれるほど長い間、サイコロのゲームに打ち興じるが、このサイコロはわれわれのもののように骨でできているのではなく、木片からできているのだ。それに比べ、冬の間の男性は見たところあまり目立つ存在ではない。ほとんどの時間彼らは暇そうに煙草をふかしながら、狩りや戦場での体験など、また、しばしば大きな兎⁵にまつわる滑稽な出来事とか、あるいはまた、もっと真剣で大切な性格をもった神話・伝説などを語り合っている。しかし、全体としては小屋の修理や魚釣り道具の修繕、斧、槍先、その他、生活に使う道具、秋の間は放っておいた、いろんな物を大量に作るのに多くの時間を費やしている。

トクルキが自由に走り回れるようになったころ、叔父さんが一本の長い、中が空洞になった籐の茎で吹き矢の筒を作ってくれ、先端をあざみの冠毛でくるんだ籐の吹き矢を数本まとめてつけてくれた。それから鳥や小動物などで腕を試すようにと彼を外へと送り出した。鳥やリスを持って誇らしげにトクルキが帰ってくることは一度や二度ではなかったし、ときには兎さえ射止めることもあった。もう少しあとになると、家の人たちは本物の弓矢をもたしてくれるようになり、これで兎や野生の七面鳥を射ったことや、また、あるときなど仔鹿に狙いをつけながら至近距離まで近寄り、これをしとめるのに成功したことも楽しい思い出である。彼は意気揚々と帰宅すると母親にどこで見つけたかをとくどくとして語り、頬を紅潮させて家中の——特に叔父からの——賞賛の言葉を聞いたのだった。

トクルキの父と叔父が木彫の技術を教えてくれたのもこの頃である。二人は切り取った鹿の首の内部をくり抜いて、これに副木^{ふくぼく}を入れ、ほとんど原型のままに保ち、これを頭からスッポリ被って実際の鹿に近寄っていく、そのときの様子を実演してくれたほどだった。それにまた、殺した鹿はその肉の一部を切り取って地面に返してやれば、残ったほかの鹿が気を悪くして逃げていくことはない、ということも教わった。しとめた獲物の骨を犬に喰わせるときは、あまり遠くに投げてはいけない、動物たちが今後脅えて近寄らなくなるから、とのことだった。仲間と狩りに出て焚火をするときは、隊長が煙草の若枝を一本、その火の中に燃べなければいけない、そうすれば悪霊に追いかけることはない、と言い聞かされた。もっと大きくなると、

狩猟で必ず獲物をあげるために必要な、ある種のまじないや、呪文を習ったのである。

春が来るとすぐ、各家族思い思いの、かなり自由な狩りが始まったが、年毎の祭りや、トゥモロコシの収穫⁶⁾が終るまで町からあまり離れないところが多かった。もちろん飢饉のために必要に迫られたときとか、魚の遡上が始まり、みんなが一斉に川の、或る地点まで押し寄せるようなときは別であるが。この間トクルキは熊の保護地区になっている、タルサからさほど遠くない、森の或る場所に出かける町の狩猟団に加わっていた。ここは熊が多く棲むところで、町の人々の共有財産になっていたのである。一行が熊のいる一本の木に近寄ったとき、彼は脇に立ってそのやり方をじっくりと見学した。男が一人、めざす熊のねぐらからさほど離れていない木に登って、松脂が銀色の炎を上げている松明を受取ると、それを次々と熊の穴の中めがけて投げ込んだ。穴の住民が追い出されると、たちまち下に並んでいる猟師どもに殺された。熊の肉は町の人々の間で配られ、当座の食料となったが、脂身は取り出されて味見されたのち、鹿の革でできた袋に入れられ、あとは冬のために貯蔵される。一方、女たちは薬根を求めて森の中を探し回った。特に塊茎類や、ここの人々がクンティと呼ぶユリ科の根である。彼らはまた、水蓮の種を集めるし、少し後になると、おびただしい蕈類が取れて食事の献立を豊富にするのである。

四月になると、ミコ、つまり、この町の首長は有力者を集め、この後まもなく、春の最初の式典が行われたが、断食、さらには赤柳とユリアザミの液を飲む行事もこれに伴うのである。五月、六月の満月の折にも、同様な祝賀が催される。しかしこれは大断食、ポスキタ、すなわち南東インディアンの宗教上の儀式としては頂点に位置するもの、の準備段階に過ぎないのだ。こういうわけで、ほぼ七月の半ば、使者がトクルキの家に現れ、家長に鹿の腱で括った包物を渡したのである。手渡す前に、この使者は包の中から一本の棒を抜き取り、これを放り投げた。それから毎朝、家長が同じ動作を繰り返し、ちょうど最後の一本の棒が手元に残ったその日、祝典の儀式が開始されたのである。同様の包物は、遠方また近在にいるすべてのタルサ・インディアンの家庭に持ち込まれ、同時に同じ行いを繰り返して、予定の時刻にあの真四角の広場に集合することになっていた。このとき集まれなかったものは、不敬罪および反逆罪で厳しく罰せられるが、タスタナガルギと呼ばれる戦士階級がその任に当たった。彼らは欠席者を容赦なく処罰し、財産を破壊したり没収までしたのだ。

このポスキタというのは、南東インディアンの全部族の祝祭に共通する典型的な儀式と言えるであろう。主な参加者は戦士であり、この儀式の折にたいい彼らは、一ハッジョ、一イマラ、一タスタナギ、一ヤホラなどで終る、新しい名前を貰ったが、ときには一門のトーテムの動物とか、クリーク連合体⁷⁾に属する町や、あるいはよその部族の名もこれに含まれることもあった。概してミコ、および彼の一門のものが西の部屋に、第二の「人々」、すなわちヘネハルギ——彼らは平和に貢献してきたので——が南の部屋、戦士の中で最高位のものが北、さら

に平の戦士が東に座った。それぞれの「^{キャビン}部屋」、もしくは「^{ベッド}床」には、引退した戦士が二人から四人含まれて、これら「名誉ある人々」がこの式典を司る内輪の世話人となった。ところで、このボスキタというのはまったく平和な祝典であって、ここでは昔の敵意は水に流され（極刑に相当する罪でさえ赦免にされた）、来るべき新たな年を迎えて新たな決意が述べられたのである。

少なくとも一日だけは祝宴に当てられたが、その後、積極的にこの儀式に参加するものは、みな厳格に断食を実行したものだ。それから、勇猛果敢な行為を示した人々に新しい名前と新しい勲章が贈られる一方、新たに加盟したものはツショコファに閉じ込められそこで戦士の階級、および大人の生活に入る準備としての厳しい断食が彼らに課せられた。この儀式の合間にもまた、その年一年世俗の垢に染まって汚れたと考えられる、すべての火が消されたあと、この町のまじない師、すなわち高僧による^{きりび}鑽火という、公共の極めて印象的な神事によって新しい火が点燈されるのである。この新しい火は、まず広場の火や、ツショコファの火と取り替えられる。ついでこの広場の片側に持ち込まれ、そこに待機していた女たちによって各家庭へと運ばれる習わしであった。この祭りは八日間に及んだが、その最終日、日没と同時に男たちは羽飾りのついた棍棒を持った^{フィッシュ・クラン}魚一門の一人に先導されて縦一列に並びながら川まで行進するや、全員ザンプとばかり水の中に飛び込み身を净めた。彼らは行きと同じ順序で戻り、ミコが短い閉会の辞を述べ、こうして祝典は終わったのである。

このときから収穫物の取入れが行われる時期までトクルキの一家にしても、よその家にしても、さほど町から遠くに行くことはなかった。10月にはスカンク・ダンスという神聖な祭りが催されるし、そのあと人々は思い思い、秋の狩猟へとに急ぐようにして散って行くのである。陸路露営地に赴く家もある（そんな場合は、女たちが役畜代わりになって荷物を運ぶ）が、トクルキの家族のように川の近くに狩猟小屋を持ち、一本の木（火を燃やして倒した火の力で中身をくり抜いて）から作ったカヌーを何隻も連ねてそこまで行く家が大部分である。特に森林バイソンを手に入れるのが目的であれば、家から75から100マイルも離れて狩りをすることもあるが、なんと言ってもこの季節には、来るべき冬に備えて、鹿の乾燥肉を大量に準備するのに専念する。獲物の収穫が多いときには、羽目を外したお祭り騒ぎも大目に見られる。これはたいてい、この村の男の一人が、その義理の姉妹に当たる、誰かから鹿革のボールを見せられることから始まるのである。この女性はこのとき、鹿肉、熊肉、また、ときにはリスの肉になることがあるが、これらの動物の肉が欲しいという気持ちを明かす。すると、この挑戦を受けるやこの男は、村のほかの男どもにこのことを報らせて、彼らは、大鹿、熊、またときによっては、リスの狩りに出発する。このあいだ女たちはトウモロコシ、あるいはクンティの根を挽いて粉にしたりして、いろんな料理の準備に大童の状態である。男たちが帰還する。おのおの手に獲物の肉をブラ下げてやってくると、大宴会となる。これに一本柱の球技大会、最後

にダンスと続いてその日が終るのだ。大きな篝火が焚かれ、二人の男子——一人が土製の水甕、もしくはヌマスギの呼吸根^⑧に鹿革を張って作った太鼓を持ち、もう一人が瓢箪のガラガラを持って——がすぐ近くに座る。一列か二列になった男女が、一人（あるいは二人）の先導者に続いて火の周りを、たいていは左廻りにグルグルと回っていく。このダンスには、現実の、あるいは空想上の動物の名前が付けられており、またこの踊りのステップや動作も彼らの動きを模倣したものである。伴奏となる歌は、ほとんど男性が引き受けている。

二、三日すると、もう一度ボールが提示されて、また同じ宴会、球技、ダンスというふうに、これはときには寒くなるころまで続けられるのである。

ときどき村の誰かが病魔に襲われることがあったが、こんなときはこの分団の「^{バンド}医者」^{ドクター}でもあり、同時にまた「^{メディスン・メイカー}薬剤師」でもある、トクルキの母の弟が呼ばれることになっていた。通常このような「医者」は、自ら診断を下すまえにキラ（つまり「知者」の意で、予言者と診断の役を兼ね備えたような人物）に相談するのが建前だが、しかし、この叔父は自分でその二つの役を受け持っていたので、その必要はないのである。病気の性質を見極めたあと、自ら様々な薬草を求めて出かけたり、代わりに家の誰かをやって探させることもあった。手に入れた薬草を大きな鍋に入れて水を注ぎ、火の上に置く。十分熱せられたら、祈禱を繰り返し唱えながら、中をくり抜いてある棒から息を吹き込んで薬効を高めるのである。これは四度繰り返されるが、この間医師はずっと東の方向を向いたままである。しかし、数本の柱の上に毛布を載せて作った小屋の中に焼石を何個か置いて、その上に水をかぶせた^{スエット・バス}蒸し風呂を受けるようにとの処方を与えることもままあったが、それに劣らず、バイソンの角を使って病人の患部から悪霊を吸い取って治療し、病気の原因は、何か超自然的な祟りや呪いである、と断言することもよくあった。

ところで、あらゆる薬石も効果なく、ついに病人が息を引き取ったとしよう。この場合、家族のみならず、隣り近所に住むもの全員が、叫んだり大きな音をたて始めて、もはや死者の魂がこの家に留まることなく霊界に旅立てるように大騒ぎするのである。死体は町の埋葬所に移されると、内臓をくり抜いた鹿皮にくるまれる。遺骸はとりすがられ泣き喚かれ、そのあとで床下ほぼ4フィートの深さに堀った長方形の穴に埋められ、沢山の枝木で被われ、周囲を糸杉の樹皮で縁取りされ、その上に厚い泥土をかぶせて塗り固められるのである。死者の顔は赤く化粧を施されて東に向けられる。弓と矢、戦闘用の棍棒、塗料、パイプ、煙草入れなど、生前愛用された品々が一緒に埋葬される。四日間、家族の中の女たちは号泣して、この身近な人の死を弔うのである。会葬者は全員顔を黒く塗る。夫を亡くした婦人であつたら、この女性は蓬髪のままで四年を過ごし、この間一切の装飾品は捨て去り、またあらゆる娯楽からも遠ざかっていなくてはならない。四年目のポスキタを迎えたところで、正式に夫の姉妹から喪を解かれ、同門の、もしくはそれにつながる新しい夫を与えられるか、あるいは、自分の好きな人を

誰でも夫に選ぶことができる。妻を亡くした夫の場合、喪に服する期間は四ヶ月に過ぎない。

こうした叔父のまじない師としての仕事ぶりに特別な魅力を感じていたトクルキは、許される限りいつでもそのそばにいた。彼は毎年の祭りの時期にも、あの正方形の広場で同じような行為が演じられているのを目撃したことがあった。また、もともと神秘的なものに魅かれる傾向のある、彼の心は熱心にこれらを吸収していったのである。

これまでも時々トクルキは、父親や叔父たちを含む戦士団が、敵対する部族の征伐に出かけようとしている場面に遭遇したことがあった。特に西方には、数はそれほどではないが、力と英知を兼ね備えた、類い稀な大酋長に率いられた強敵がいた。この酋長の活動は近ごろとみに脅威を増して来ていた。かてて加え、この男の背後には長い髪と呼ばれる、戦士の数においてはそれより遥かに勝る部族が彼を援助し、また教唆してもいたのである。こうしてこの方面からの攻撃が頻々と繰り返され、被害もまた甚大なものとなるにつれて、ついにタルサでは大会議が開かれることとなり、この村や町の結束を一層強固にして、周囲に大きく堅固な要塞を築こう、ということが衆議された。トクルキもまだ重労働が可能な年齢ではなかったが、この柵の建築にはできるだけ協力するようと、要請を受けたのである。年上の男たちが横壁の幅を定め、かなり大きな木の幹を2、3フィート毎に地面に植え込んでいくそのあいだに、トクルキや他の少年たちは、無数の、長くてしなやかな枝や若木を運び、それらを柱と柱の間に差し込んで、そのあとを泥土を漆喰代わりに塗り込んで隙間を固めて行ったのである。この壁の上には、100フィートの間隔を置いて小さな望楼がいくつか立てられたが、それらは敵兵によじ登られたり火をかけられて炎上するのを阻止するため、互いに少し前に張り出された。川に面した側のみ、柵は一行だけだが、ほかの所はすべて二重にされた。さらにまた、この川の側には一箇所だけ壁と壁を互い違いにして隙間が作られたが、川から侵入してきた敵兵は、この壁と壁の間の狭い通路を忍び込んでくるはずで、発見されれば必ず殺されることになるだろう。

この要塞が完成して二年後のこと、トクルキは初めて戦陣に赴くことになった。彼の分団に属する「叔父」がこの戦隊に参加しており、この機会を利用して甥を部族の主要な制度の一つ、^{マン・キリング}戦争に参入させようとしたのである。これは個人としての榮譽ならびに社会的地位の達成のためには最大の方法であり、また一番の近道でもあったからだ。戦隊の指揮官にはほかならぬタスタナギ・ラコ、すなわち、「この町の戦時酋長」が当たることになっていた。そのために彼が志願兵を召集したときは、大望を抱くこの国の青年たちが大挙押し寄せたのである。四日間全員がツショコファに籠って断食をし、また戦いに備え特別な薬草を飲み、踊り、かつまた、士気を奮い立たせ適度な怒りを醸成するために「軍歌」を唱ったのである。彼ら兵士の一人一人には戦闘用の棍棒、弓、矢、^{えびら}箆、籐製、あるいは野牛の革製の盾、火おこし棒の入った袋、塗料、それに食料としてトウモロコシの挽割りの少々、が配られた。儀式が終ると、早朝縦一列となって出発した。部隊は火打ち石で作られた聖なる箱をも携帯するが、これはたいい指

揮官を補佐する、副官の背に載せて運ばれ、露營のたびに丸木、もしくは柱に吊される。特にこの中には、ここの人たちの先祖が極西部の国々からの帰途にしとめた巨大な豹の骨の一部に彩色をほどこしたものの、さらに水棲の角蛇の角の一部が入っていた。この箱はお伺いをたてれば、お告げを出し、戦隊の進む方向、さらには敵の待ち伏せなどをも警告してくれる、などと言われることもあった。

このとき、おそらくこの守護霊のご加護のせいであろう、敵の四つの陣営を急襲して12の頭皮をえ、二人の成人男子——火あぶりで死刑にした——のほかに15人の婦女子を捕虜として連れ帰ることができたのである。この戦闘の間にトクルキは戦時酋長の従者を背後から打とうとしていた敵兵一人と交戦し、命を救ってやるという幸運にも恵まれた。そこでこの凱旋勝利のあと、彼は多くの人が欲しがる羽つきの帽子を受取り、初めて戦士名をもらい、また広場の中の東側の家に席を与えられたのである。

彼は社会の階梯の、まず最初の一段を上り、国家の行為を決定する最も秘密の会合や最も重要な会議など、そのほとんどすべてに参加することが可能になった。まもなく、さらにもう一つの戦士名を授与され、タシカイアスの家から北の家の東端に位置するイマラスの家に移った。なお、このあとの戦功によってタスタンギスの階級を与えられる資格はあったのだが、もともとが白い風一門の出身であるために、代わりに反対側の平和の家の名誉議席を与えられたのであった。

トクルキは武勇に優れてはいたが、しかし、同輩のものほど戦争そのものに興味は持てなかった。すでに述べたように彼は神秘的なものに魅かれる傾向が強かった。祭儀や式典の影響が大きく、また呪医としての叔父の職業にたえず魅了されていた。記憶力に恵まれていたから部族に伝わる故事来歴をたちどころに覚え、たちまち聖なる伝説や儀式の保存を任ずる老人たちの注目するところとなった。彼らは将来の部族の精神的な指導者としてトクルキについて熱心に薬草医と語り合ったのである。その結果、この叔父の提案でトクルキのほかに風一門の中から最も有望な若者が三人、このボスキタ（この場合あえて訳せば）「初等医学」の教育を受けることに同意したのである。

これらの若者を家に呼び寄せて、この薬草医兼祈祷師は熱心に彼らに語りかけ、次は人里離れた小川の岸に近い、森の奥のある場所で会おう、という約束をした。約束の時刻と場所に彼は姿を見せ、この小川の岸辺にスエット・ロッジを作るように指示した。それから教育が開始した。彼は一度に理解可能と思われる初歩的な知識を何度も繰り返し、自分の言ったことに注意して今度くる四日後までに全部暗記するように、と言いつけた。同じ間隔をおいて彼はたびたびやってきて教育を続け、それからほぼ一ヶ月たったころ、生徒の進歩に満足し、もう家に帰ってもよろしい、と告げた。「これでもう、君らは弓矢で受けた傷の治し方を理解したので、髪に禿鷹の羽を付ける資格があるな」と言ったのだった。

実はこの資格はトクルキの場合、最初の出征のすぐあと、手に入れていたものだった。というのはここしばらく、ほかにいろんな事情が重なって彼の^{イニシエーション}加盟儀式はつい、のびのびになっていたからである。家族の人たちは、まず第一に妻を娶って独立し、家長としての責任を自覚することが、部族の中で主だった地位を得る前提だと考えたのだ。彼は自然の成り行きとしてこの縁談に同意した。そこで彼の母親は同門の二、三の女性と一緒に花嫁候補として選ばれた女性が属するアライグマ一門の「叔父」の家を訪問することになった。訪問を受ける側もむろん、これが結婚の申し込みに当たることは心得ており、一門の主だった人々、つまり、当の娘の母親、さらに慣例として父親をも呼んでいた。それから二、三日してアライグマ一門の人が訪問を返した。結婚に同意する旨を伝えるためである。それから花婿を花嫁の家に招き、その場で宴会と舞踊が行われて、結婚の儀が完了するはずだったのだが、トクルキとその両親は今すぐにでも部族内での高位を望んでいたから、家が建ち、トウモロコシや鹿肉の蓄えが十分に備わるまで式は延期することにしたのである。

この町に住む風一門の男性全員に指令が下った。森に行き、柱、樹皮、樹皮の縄、それに予定の家を建てるに必要な他の品物を集めてくるように、というのである。トウモロコシの植えの季節が始まっていた。町有の畑の区割りが行われて、新しい家長のための新しい畑に種が蒔かれた。この取入れの準備が出来ると、家を建てる敷地の近くに数本の柱を基礎に納屋ができ、トクルキの畑の収穫物で一杯になった。収穫が終わって戸外での仕事が快適になる涼しい日々がやってくると、風一門の男たちは再び集まって新しい家を建てる日を決めた。この仕事はちょうど昔のニューイングランドのあの^{ハスキング・ビー}皮むき寄り合いそっくりに行われる。一切はこうした仕事に最も秀でた、ある一人の人間の指揮に委ねられて、残りの人にはそれぞれ全体の一部をなすような、いろんな仕事が振り当てられる。全員が非常に協力して働いたので、午後半ばにほとんど家ができて上がった。球技のあと、日が暮れてからは踊り、さらにそのあとに食事が振舞われる。ソフケー、我々の社会の^{ハルド・コーン}皮トウモロコシのようなもの、が鍋に入れられ参加者全員に行き渡るように準備されている。

この後間もなくトクルキは狩りに出て鹿の乾燥肉を持ち帰り、冬の貯蔵を増やすことができた。新郎・新婦が新居に連れてこられるのはこの後で、みんな揃っての最後の祝宴が始まり風、およびアライグマ両一門の指導者が祝辞を述べ、それからやっと二人きりになれる。

この期間のトクルキの暮しは多忙を極め、かつての希望を考えるような暇はなかったのだが、最初の子供が生まれ毎日の生活が軌道に乗り始めるようになったころ、ふたたびその思いが強くなってきた。かつての三人の僚友に連絡して気持ちを伝え、彼らも同じく加盟儀式の続行を希望していることがはっきりした。そこで再び薬草医の元を訪れ、断食、スエット・バス、さらには前よりずっと宗教的な知識を口伝により繰り返し教わった。今度彼らがとくに力をいれて覚えたのは、蛇の咬傷の治療法であり、また夜の暗闇の中で物を見分ける方法（ここでは

それが可能と信じられている)であった。

トクルキはそれでもまだ不満だった。新しい知識に目が開かれるたび、また新たな野心が芽生えて来たからである。三人の仲間はしかし、これまでに手にいれたもの、およびその地位に満足し、長い苛酷な断食にはもう疲れ果てていた。それでトクルキ一人が第三段階に進む志願者として現れたのである。実際、このとき体験した試練というのは、非常に厳しいものだったので、さすがの彼ももうここで止めるべきかどうか自問自答したほどであった。しかし、止めるどころか、マスコギ連合全50の町村のまじない師の中でも10何人をのぞけば、他の誰にも劣らない深い域に到達したのであった。

彼は第四段階、さらに最終段階を受ける前に、二年の猶予期間を置いた。しかし、結局この課題に挑戦し、見事にこれを通過した。断食期間は二倍。また、これまでとはとても比較にならない多くの秘伝の記憶が課せられた、大変な難関であったのにもかかわらず。まったく人間というより、その影のような状態で彼は戻ってきた。頬は落込み、目は窪み肉は抜け落ちてほとんど骸骨同然の姿ではあったが、連合においては二、三の大部落の呪医(薬草医)を除いて誰一人手にしたことのない、地位と影響力を手に入れたのだった。トクルキは、指導者でもあり叔父でもある、このタルサのまじない師と、今や肝胆相照らす仲になった。トクルキのような高い精神性と、着実な目的を持った人物が、目上の人の興味を引くのは当然のことである。もしもこの祈祷師が死んだり、指導的権威を手離したりするとき、その地位はトクルキにとって代わられることが明らかだった。この二人のあいだでは、実に多くのことが話され、様々なことが話題となったが、年長者は長い人生経験から得たもの、また内面的な瞑想によって獲得した、そのすべてのものを後輩に披露したのである。トクルキにとってあるものは新しく、またあるものは既に他の物知りから聞いたものではあったが、物珍しくまた馴染みのないものも多くあったのだ。

タルサの賢者が描く世界像は以下のとおりである。人類が知っているこの大地は中間にあるもので、形は平らで四角、^{ザ・ワイド・ホワイト・ウォーター}大きく白い水の上を漂っている。大地の上にもその下にも別の世界があり、そこにもまた我々のような生き物が棲んでいる。下にいるのは、いま大地にいる人間が地表に出る道を見つけたそのときに置き去りにされた人たちだ。上にいる人々は、大地に暮らしたことはあるが、死後、西に向かって旅をし、1フィートの丸木に乗って海流の中の狭い、ある一点を越えるときに、その場所に留まり悪霊たちと住むようになったか、あるいはまた、頭の真上にある、ヒサキタ・イミシ、「息をもつもの」によって統治されている、あの幸運な場所に登ったか、どちらかだ。我々が天の川と呼んでいる、空のあの白い筋は彼らが渡った道そのものにほかならぬ、と言われている。戦いで殺され、未だ恨みを晴らすことのできない魂は、自分を攻撃した敵方の部族の頭皮が霊前に供えられるまでは旅立つことを望まず、この間ずっと、軒下に留まって呻吟しているともいわれる。悪霊は獣に生れ変るといふ人もい

るが、これについては異論もある。しかしながら人間は妖術師のようにまだ地上で生きているあいだでも、動物の姿に変装するような邪惡な力を手に入れることは十分可能だという、この点においては合意を見ている。この妖術師の邪惡な性質は彼らの体内に巢食う蜥蜴のせいだとみられているが、しかし正しい呪術を用いれば、これを追い払うことは可能である。

星辰は太陽と月が毎日航行する、あの分厚い丸天井の表面に張り付いているものと考えられた。日食はたいていは人間が示す敵意におびえた大ヒキガエル^{グア}のせいで起こる。月食にはほとんど注意は払われない。月には人間と犬が住んでいる。虹は大きな天の蛇であり、雨を支配している。

世界と、そこにあるすべてのものは、人間の心が造りだしたものであり、あらゆるところに心の痕跡が残っている。物質が心を生んだのではなくて、それはもともと心だったもので、そこから心が引き上げたために今は動きがなく、静止した状態にあるが、ふたたび目覚める可能性もある。この心は植物、さらに動物のようないわゆる「生き物」のなかにはっきり示されている。にもかかわらず、動植物よりもむしろ無機物の中に潜んでいるのが最高の形の心、つまり、人間性なのである。これはいつでも表面に表れるものだが、特に断食している戦士、すなわち「知者」や、まじない師の上に姿を見せる。実際、この人たちの重要性は鉱物、及び植物・動物などの自然の中に人間性を洞察することにあるのであり、さらに同胞の生活を訓導しその生命を扱う際に、価値のある知識をそこから取り出すことにあるのだから。心というものは一人の人間の中にあるだけではなくて、あらゆる事物には同様な性質、靈魂が存在する、と認識されていたのである。

そこに顕われる諸々の靈は、すべてが等しく強力なわけではない。豹や熊、バイソンの精靈は、アライグマや兎やリスよりも強力である。しかし、ある無機物の靈力、例えば、風、河川、海などの、断然強い。特別強い力を持っているのは、雷と稲妻であり、これは二種類の動物によって引き起こされる、とされた。危険な種類——「人に落ちる」危険な雷は、両目から火を放つ巨大な鳥によって引き起こされるが、この鳥がこれを別の、やはり火を出す生き物、巨大な角蛇に向かって放つと、今度はその蛇が青い、無害の稲妻を上の方に放つのである。これらの陸上の蛇の骨が、ときどき嵐のあとに見つかることがある。それにまた、水中に棲む長い蛇がいて、これらはよく、その巨大な胴体をまっすぐ持ち上げたあとで、そのまま水中にパシャンと落下して大きな水しぶきをあげたりもする。また胸尖りの蛇というのは、稲妻の光る形が先住民の想像力を刺激したもので、進むときに草の根や藪を切り裂きながら地面を直線的に走る、と考えられているものである。静かな朝、旋じ風のように上空に駆け昇る、胴体のない蛇もいる。それに四頭単位で動くバイソンのように、それぞれが先に通った仲間の臭いを嗅ぎながらその跡で少し休む生き物もいる。ときどき旅人から意識を奪う小人もいれば、彼らを食べてしまう巨人もまた存在するのだ。

これら自然の中に形を顕わした力のほかに、形には表れない——あるいはそれほどハッキリ

とは表れない——力というのもあって、両者にさしたる違いはない。これらの力は、まじない、およびある種の呪文を繰り返すことによって喚び出すことができる。「一言で」驚くべきことが達成できる。「一言で」全世界は言葉の達人、まじない師^{メディスン・マン}の足が四歩で作り上げる、その小さな空間——円の中に圧縮されるのだから。薬草に賦与されるのは、この種の力であるが、この力の源は結局、神人同根的な力というべきであり、これによってそもそも、病気はどのような性質のものであるとか、その治療に当たってはどのような療法が使われるべきかを明言できるのである。しかしまじない師がこれらの薬草、護符を用意して目の前の容器に入れたとしても、処方通りのまじない、つまり、一種の祈りのようなもの、を四度繰り返し、その間、中が空洞の棒を通して薬草に息を吹き込むまで、まだ効力は表れない。このようにしてその薬草の効きめを強力にする霊力が、まじない師の命、息を通して伝えられるのである。

クリーク連合体の至高の神、ヒサキタ・イミシ(「息をもつもの」)という名の一種の天空神はこうした考えから生まれた。この神は、下位の神々と人間との関係に必ずしも積極的に干渉したりはしないが、その優位はわきまえられ、諸神は彼の従者、彼は彼らのミコ、長として語られる。

病気の際、個人に起こったことは、毎年、ボスキタの折に部族全体に起こった。部族の構成員である個人同様、部族を象徴する一つの生命の長寿のため、またその命が年毎に更新されるようにヒサキタ・イミシによって息が吹き込まれたのである。正方形の広場の火は、天の火である太陽から分かれた、その破片なので、これらはどちらも生命を意味している。なぜなら両者とも人間の命に必要不可欠だからである。火の更新は生命の更新に通じる。それによって人間の生命と宇宙の生命の関係が回復されるし、また前の年に採られた火の周囲に積み上げられた汚れや腐敗が取り除かれる一つの行為なのであるから。これと同様に参加者はボスキタの薬草によっても内面を浄化される。その効能の第一は身体の欠陥を是正して病気を治してくれることにあるが、一方また、より前向きな幸福の享受を保証してくれることでもあるのだ。したがってそのごく少量が各家庭に持ち帰られて戸口に吊され、翌年、また儀礼のときがやってくるまでその一部が薬としてときどき用いられているのである。

万物の始まりについてマスコギ語族には曖昧ではあるが、いろんな伝承が残っている。この堅い大地は世界の隅々から、あるいは海の底からもたらされた少量の土が拡大したものだ信じられていた。彼らはまた、洪水についても語ったが、彼らの人類創造譚は彼ら以外の部族にはまったく関連がなく、密接な関連が認められるのは少数の部族のものだけである。世界の臍と呼ばれる極西部のその地点を通して地下の世界から這い上がってきたあと、人間はまじない師^{メディスン・メイカー}に率いられ長い間南東に移動してきたが、実はこのまじない師はまた一本の杖をたよりにしていた。毎晩地面にまっすぐ突き立てておいたのが、朝になるとすこし傾いている。この方向へ向かって旅が続けられたのである。一方、世界の隅からは四つの「光るもの」がボスキタの知識を彼らに伝え、最初のボスキタを点火した。この間、マスコギに属する数部族とそうでない

幾つかの部族のあいだに友情の絆が芽生えた。二つの主要な部族、カシッタとコウェタが定期的に球技を競う、そのあいだは休戦するという同盟を結び、この他、相当の数の町（つまり部族）がこれに加わった。あとから加わった部族も球技に加わったので、結局片方に約 25 の町村（チーム）が所属するリーグが二つ出来上がったのである。この両リーグはそれぞれ別の役割も分担することになった。カシッタに率いられた方は平和を、コウェタ率いる町村は戦争に専念する……という具合に。

ある日——夏の終わるころ——トクルキとまじない師は町からかなり東の方へ散歩し、とある丘の斜面に腰を下ろした。ここで年長者はこれまで自分が教えた中でも最も重要な事柄の数々を一段と力を込めておさらいした。しばらくして彼は言葉を区切り、それからこう続けた。「これでもう、わしが知っていることはすべておまえに伝えた。これはわしの前のまじない師が教えてくれたことでもあるし、あらゆる知者、呪医がわしに教えてくれたことでもある。いや、そうに違いない、とわしは確信している。でもな、それにもかかわらず、全部が全部、真実であるというわけではない。先達者の教えの中には言葉だけでは理解できないようなところが含まれている、とわしは思う。表面的な意味とは違う、別な意味も含まれておるからじゃ。ときにはこの別の意味がわしらにわかるときもあれば、わからないときもある。おそらくはまた、ボスキタの火のように世俗にたびたび接触し、繰り返し使用されたためにすり減り汚れてしまったせいもある。おそらくヒサキタ・イミシはわしらの祖父にすべてを語らなかったのかもしれない。でも、いいことはたくさ入っているし、みなわしら部族のためを思っていることだ。だからおまえがよいと思ったことを使えばよい。ほかのことは使う必要はない。それと、もしヒサキタ・イミシがほかにもっとよいことを言っていると思うことがあれば、またその方がみんなにとって有益だと思えるならばそちらを使うことだ。すべては初めからヒサキタ・イミシが意図した通りのことでもある。わしがこんなことをいう理由は、これからおまえたちが迎える時代はわしらの時代とは違うものになると感じるからなんだ。草木は死ぬ。だが、春になればまた生き返ってくる。同じ植物ではあるが同時に、同じ植物ではない。同じものに見えて同じものではない。

「翼の付いたカヌーに乗って、あの大きな白い海の向こうからやってくる人々のことを聞いたことはあるかな？ ほら今も、このわしの耳には国中を進む大勢の人の足音が聞こえている。しかもその音はこっちに向かってやってくる。たぶん、古い物は死んでいくのだろう」

彼はそこで話を止めた。ちょうどそのとき東の方から低い音が聞こえてきたが、それはそのときまでこの国ではまだ誰も聞いたことのない音だった。しかし、当時の白人なら誰でも火縄銃の音だとわかっただろう。それは、デソート⁹⁾率いる軍隊が放った火縄銃の音であった。

Ⅵ 南西部の部族

Ⅵ-1 アパッチ族¹¹⁾の細長き女^{スレンダー・メイドン}

細長き女^{ひと}は12日間踊り続けることになっていた。アッシュ・クリークの沿岸ではもう、団栗の実が熟れてきた。雄鹿の角も立派に生え揃い、その身はすっかり太ってきた。雷雨の降りしきる今、一年で最もよい季節になったのだ。この春ごろから、細長き女の母親は娘が、めっきりと女らしくなったことに気づいていた。前の冬、父は黒川^{ブラック・リバー}の向こうの山まで出かけて、半年も狩りをした。その極上の鹿皮は丹念に鞣めされて大事に蔵われた。西に一日ばかり行ったところ、シビキュウ・クリークのほとりに鹿革服の仕立てにかけては評判の男が住んでいた。細長き女の父は、四枚の鹿革を携え、それに数ある馬の中から二頭を選びすぐって、この仕立屋のところにやって来たのだ。馬は仕事の報酬に与えられるのである。父は、トウモロコシが房をつけるころに服を受取においで、という返事を貰った。

細長き女もその母も、にがよもぎ^{ワーム・ウッド}一門の出であった。この一門に属する多くの女性は、互いに近隣に暮しているので、祝宴の際は進んで食料集めに協力することを誓い合っていた。父親の方は、日干し煉瓦^{アド・ビ}¹²⁾一門の出身。彼も兄弟たちから鹿肉の供給の方は、踊りが近づけば大丈夫、狩りに加わるから、という約束を取りつけていた。幸いなことにこの一家は馬をたくさん所有していたので歌を唱ってくれる人たちや、式を取り仕切ってくれる人に謝礼する馬にはこと欠かなかったのである。

細長き女の父親は川を上って沼地まで来た。そこに群生する葦を刈り取るためだ。これで煙草を入れる筒を拵え、また適当な角度に織り上げて十字架を作ったのである。こうした品物は細長き女の従兄——最近どうやら、つまめるだけの髭を蓄えたばかりの若い男——によってイースト・フォークに住んでいるまじない師の元に届けられた。この人物は思春期の少女の踊りに使われる、ナイイエネズガニの歌に詳しいと言われている。若者はこの歌い手の家に着くと、自分のつま先の上に十字架を置いた。老人は、この象徴に手を伸ばして、何処から来たかと若者に向かって尋ねたのだった。

「にがよもぎ一門のものです。踊り小屋のある谷間からやってきました。細長き女の父親、わたしの叔父が十二番目の日に、アッシュ・クリークの白楊^{はこやなぎ}の下¹³⁾で娘のために歌を唱って下さい、と頼んでいます。この鹿革服、それから、このトルコ石、黒玉、白石、赤い珊瑚を結び合わせた数珠を贈ると言っています。それに馬一頭と旧メキシコ製の鞍もです」

「お若いの、まあ、座ってくれ」と、歌い手はまず言っておいて、それからパイプに煙草を詰め、若者にも煙草の入った鹿革の袋を手渡した。喫い始める前に妻に向かい「兄弟たちを呼んでくれ」と言いつけた。全員が揃ってパイプに火が点じられると、歌い手はこの若者の用向き——祭りのときに協力を要請されたこと——を皆に伝えた。食べ物が運ばれ、こうして、こ

の若者もご馳走に与ったのである。

ターキィ・クリーク沿岸のまじない師も同様の招待を受けた。ブラック・ガンの踊りに詳しいとされる人物である。

それから数日後のこと。細長き女の一門の女、また同じ村に住む女たちは、祭りのための食べ物や、必要な道具の仕分けに余念がなかった。彼らはそれを、それぞれ数頭の驢馬と馬の背中に積み上げた。出発の準備が整ったとき、日は既に高かった。檜の木の子生している小さな川のほとりで一行が野営したとき、日はもう沈みかけていた。アッシュ・クリークまでの全行程のおよそ三分の二のところに来ていたのだ。そして次の日、昼までにクリーク流域の白楊の木立の下に、この踊りのための臨時村は設営されたのである。

踊りが始まる前の日になった。流水の近くにスエット・ロッジが築かれた。このドーム型的小屋の中でそれぞれ六人、八人に分かれた男たちが、交互に何度も入浴するのだ。ナイイエネズガニの歌が唱われ、彼らは煙と蒸気を浴びて身を清めたのである。真昼、この近くに集まった人々の全員に食べ物が出された。

明るる朝、日の出の直前に四枚の毛布が広げられ重ね合わされた。先の曲がった棒が一本、この床壇の真東に立てられた。殻を剥がれたトウモロコシを入れた籠がこの棒の側に置かれた。

イーストフォークの歌い手と青年合唱団の面々は、この床壇の西端の、そのすぐ後方に一列に並んでいた。このとき細長き女が現れて合唱隊の前に立つ。それから朝日に正面から向い合った。次々と歌が唱われる中を、娘は激しく身体を振って前後左右に動いて行く。ある歌のところまで来たときだ。彼女はその場に膝まづいた。顔を朝日に向けたまま、左右の膝を動かして蟹のように横這いでにじり寄って行ったのだ。やがて床壇の上に突っ伏すと、そこで母代わりの付添いの手で美女の容姿へと変えられて行く。最後に後ろに並んだ全見物が彼女のために祈りを捧げ、その頭上を飾る王冠には、花粉がサーッと振り蒔かれたのだった。日輪がその冲天のほぼ半ばにさしかかったか、と思われるころ、彼女は決められた通りに競走に出て、こうして祭儀の朝の部は完了し、皆に肉とスープが振舞われたのである。

その日の午後の日暮れどきだ。現れ出たる異形の男。半ズボンのみの半裸体だ。白く塗った上半身を黒い縞目で飾っている。踊り場付近にやってきて、身振り手振りで尋ねている。踊りはもはや始まったかと。そうだ、と言われたこの男、離れたところに駆け戻った。まもなく奇妙な音が聞こえてきた。ガラガラを鳴らす音だった。縦に一列、四人の男。白と黒の斑に塗った道化があとから続いて来る。この四人、腰から下はキルトとモカシン。黒く塗ったその上半身には白い図形が描かれている。何かシンボリックな意味合いがその図形にはあるようだ。顔は仮面で隠されている。木製の派手な模様入りの扇がその頭の上を飾っている。踊り場をぐるりと一周すると、そのあとはしばらくの間、この仮面団の踊りが続いていた。それからサーッと彼らは引き上げて行く。

辺りが夕闇に包まれて大きな火が焚かれたころ、仮面団が戻ってきた。棒を握った細長き女が火の傍で踊り出せば、他の娘たちも加わってときには、若い男を誘いながら一緒に踊っていた。仮面団が踊るそのあいだは、ターキー・クリークの歌い手が成人式の祝典では人間の中に加わると言われている、地神、ガンの歌を指揮したのである。自ら引き延ばした毛皮を叩いて拍子を取り、合唱団はこう唱った。

地面がつくられ
空がつくられたとき、
黒い地面の頭の先と
黒い空の頭の先と
その二つの頭の先が触れ合った。
黒い天神と黒い地神がぶつかり合って、生命の素が飛び出した。
黒い地神は踊りながら四度、相手に話しかけた。¹⁴⁾

ほぼ真夜中と思われるころ、イースト・フォークの歌い手とその協力者らが登場した。四つの柱だけで立っている、ある家の決まった場所に彼らは陣取った。ここでも火が燃えていた。うしろの方では、同年齢の少女が一人、それに若者二人に伴われて細長き女が東に向かって立っていた。夜明けが来るまで踊る若者の動きに合わせてナイイエネズガニの歌がときたま唱われた。

エスツンナドゥルへ
その白い雲の家 生きている白い貝は汝が主
ごろごろと 鳴り響いてくる。
エスツンナドゥルへ
その永く 幸多き生き物は 汝が主
ごろごろと 鳴り響いて来る¹⁵⁾

朝餉のあとに、さらに多くの歌が唱われた。ついで仮面団が現れてまず、細長き女を白土で塗り、さらに見物人全員の頬や手にもいろんなシンボル・マークを描き込んだ。これで式典は全部終わった。参加者はやがて三々五々散っていった。団栗を集める人もあれば、また、作物の世話のためにそれぞれのキャンプ地に戻って行く人もいた。

アッシュ・クリークでの祭典に集まった人々の中には、^{レッド・ボーイ}赭ら顔と呼ばれる青年がいた。家はピマ族¹⁶⁾の領土からさほど遠くない、百マイルほど西南のサン・ペドロ・クリークの沿岸に

あったが、この間、^{ホワイト・マウンテン}白山¹⁷⁾の親戚の家に遊びに来ていたところだった。彼の母は日干し煉瓦一門であり、その母の兄弟姉妹もまた^{ホワイト・リバー}白川沿いに住んでいたからである。

この赭ら顔が細長き女に大いに興味を抱き、ぜひとも妻にしようと考えた。願いが叶って両親から贈った馬が受け取られた。細長き女自身も喜んでいて。この人は背も高く、両親から届いた贈物も気前よかったからだ。夫婦になった二人はまもなく黒川沿いのある村に移住し、この地に新居を構えた。しかし、新妻を一人残して夫はメキシコ襲撃の小隊に参加し、しばらく家を明けることになった。十日後、隊は帰還した。一人の死傷者も出さず、しかも多数の馬を持ち帰って来た。赭ら顔は十頭を貰い、それを全部細長き女の両親に差し出したのである。

翌年の春、赭ら顔と細長き女はサン・ペドロ・クリークのほとりの、ある村に行って赭ら顔の母親が所有する土地を耕作することになった。五年間彼らはここに住んで、実りのよい作物を栽培し、また周囲の山々ではたくさんの鹿を得たのである。

八月のある日、細長き娘とその義理の妹はクリーク端の白楊の森の下で籠を編んでいた。細長き女の五才の娘は、ずっと川に近い一本の柳の下ですやすやと眠っていた。そちらは微風もあるし、ずっと涼しかったのだ。突然、ゴーッという音が聞こえてくると、壁のような泥水や、引き裂かれた木々が溪谷から押し流されてきた。女たちは堤防に飛び上がったが、眠っている子供のそばに達するまでに水は、もう濁流の中にその子を運び去っていた。彼らでさえ白楊の木に登ってやっとのことで難を逃れることが出来たほどだった。

娘を亡くし、また農場も鉄砲水で流されてしまい、すっかり気落ちした細長き女とその夫は白山地方に引っ越した。彼女の家族が住む白川に近いシーダー・クリークの沿岸に身を落ち着けたのである。ここで十年間暮らした。五人の子供が出来て、末が女の子だった。

ある日、白川から使いがやってきた。細長き女の主人に病気の治療を依頼して来たのである。赭ら顔には病氣平癒の歌や儀式に多少心得があったからだ。彼は妻とともに急病に倒れた男を訪ね、その近くに泊り込んだ。病人は燃えるような熱に苦しみ、身体中発疹で覆われている。結局、薬石の効果なく夜明け前にその男は死んでしまった。遺体は近くの溪谷の石の割れ目に安置され、棒や石で覆われたのだ。

その日の午後、細長き女とその夫は白川を下った。数日後、二人は今度は黒川に行き、その水で沐浴を済ました。その晩のこと、彼女の頭が痛みだしたのだ。「あなたに病気が移ります。私のことはあきらめてもう行って下さい」と夫に懇願したのだった。十二日経って熱は引いた。気が付くと夫が側に座っているではないか。看病に疲れきった様子である。

「どうして私を置いて行かなかったの？」彼女が尋ねると、

「長年連れ添った夫婦だからだよ」と夫は答えた。

数日すると、主人が今度は病気になった。病み上がりの細長き女は必死で看病したが、その甲斐はなかった。あっけなく夫は死んでしまったのだ。やはり峡谷に運ばれて埋葬されたので

ある。伝染病が治まったときには細長き女の子供たちも、それから親兄弟さえも、みんな死んでしまっていた。ただシーダー・クリークの叔母に預けておいた末娘だけが生き残ったのだった。

もちろん細長き女は髪を切り、スカートと布切れ一枚のポンチョ¹⁸⁾だけを身に着けて過ごしたのだった。一年の喪が明けたその後も、まだ髪は伸ばさなかった。夫の一門の人たちも彼女の意思を尊重して決して再婚は勧めなかった。残った小さな土地を耕やし続け、娘の育児に専念したのだった。

その昔、長寿を望んで踊り続けた成人式での、あの祈願はとうとう実現したのだった。彼女はもう、杖に頼って歩くほどの高齢者なのだ。髪の毛の白さは白土を塗ったからではなく、老いのしるし、永生の証明である。娘も中年になった。未婚だが人望は篤い。自分のこと、それからかなり数が増えた財産（馬）の管理に余念がないが、母親の身体のことにも気になっている。もう、この後は若き日の、あの楽しい思い出の中に細長き女は生きるのである。

P. E. ゴッダード¹⁹⁾

VI-2 宝石商ジョンが病気になったとき^{原注1)}

（アリゾナ州の聖ミッシェル寺院にてフランシスコ派神父によって語られた物語）

あなたはここで以前ナヴァホ族²⁰⁾の友人に会ったことを憶えておいででしょう。ほら、われわれが親しみをこめて^{ザ・ジュエラー}宝石商のジョンと呼んでいる、あの^{シルバー・スミス}銀細工師のことですよ。今年初め、この人はコホニーノ峡谷²¹⁾に四日間滞在したあと、峡谷を出たその翌日にマラリア熱にとりつかれてしましましてね。丸二十日、毎日悪寒に続いて発熱と譫妄状態を繰り返す有様でした。それにこの奇妙な病気の影響で彼は異様な抑鬱状態に陥りこの二十日間、まったく廃人のようでしたよ。

宝石商ジョンはなかなか評判のよい^{メディスン・マン}呪医——^{マイナー・プリースト}初歩的な聖職者といってもいいでしょう——なので、友人である大勢の同業者が見舞いにやってきましたが、この病気がどういうものか誰にもわかりません。「医者」も患者も原因は「コホニーノ峡谷から出る悪臭」である、と考えたがっていました。ですが、この患者が見物していた時期は移動中のパイユート²²⁾の^{バンド}分団がやはり滞在しており、その悪臭の源がパイユートである、とも断言できなかったのです。

なにはとりあえず、この地方最高の名医を呼ぼう、という結論に達しました。最初に呼ばれたのがオジカイ・ヨスナ。この人の執り行う儀式や歌謡はすべてイエィ²³⁾という精霊に祈願したもので、これはあらゆる人間がこの世界に這上がってくる途中、また死者の魂が下界に帰っていく途中に経由する、地上と地下の中間にある穴の入口に住む精霊のことです。

この穴はツホリィイと呼ばれている北の山の山頂にあります。呪医は患者とこの穴の間の、

とある森に火を付けて、この火のそばから、穴の入口に座っているイエイに祈りの歌を捧げます。死者の国に続く梯子を下りろと患者を誘うイエイに赦しを祈願するのです。まず最初にバイソン、野生ヤギ、ヘラジカ、鹿の脂身と、家畜の羊の脂少々とを混ぜて作った溶液を患者の体に擦り付けておいて、次に灰と魔除けの火から取り出した、この炭の粉を患者の全身にまぶしつけました。この炭と魔除けの火の灰を皮膚にくっつけるのに、脂は必要なのです。脂を塗り込んだあと、患者のそばでふたたび歌が唱われる。

オジカイ・ヨシナの儀式は二日二晩続きましたよ。報酬は馬一頭、50ドルくらいでしょうかね。

次に登場したシャーマンはクマ・バイジュ。病人の小屋に粘土で中が空洞^{マウンド}の塚が作られ、この空洞に三つ、石が置かれました。その上にピニオン松とヒマラヤ杉を細かく切ったものを載せて火をつけます。焼けて燠になったところに、シャーマンはガラガラを振って父親たるイエイに唱いかけるのです。それから5本の薬草^{ハーブ}が燠の上に置かれる。患者は火の近くの地面に素裸のまま寝かされる。火が毛布で覆われる。こうして患者は薬草の芳香を胸一杯吸い込むのです。シャーマンはその間、そばに座ったままでガラガラを振り、歌を唱い続けるのです。

治療は日の出、日の入りに行われました。歌と踊り、それに夜には他の儀式も伴い四日間続けられるはずでした。しかし、二日目の終わり、ここに予期せぬ、ばつの悪い、ある出来事が起こりました。患者の妻の月経が流れ出たのです。これで突然、そのあとの治療はすべて中止となりました。クマ・バイジュの報酬は、やっぱり馬一頭、50ドルです。

奥さんの具合がよくなると、エツイディ・ビキスが呼ばれました。東の白い風、南の青い風、西の黄色い風、それと北の黒い風、この四つの風の頭領に向かってこのシャーマンが唱いかけるのです。人間が下界から出て来る前に四つの風はこの首領の命令でツホリイの穴に寄せ集められ、各々その方向を割り当てられたのです。地上が泥沼のようにまだ新しく湿ったままの状態にあるとき、その表面めがけて彼らが息が吹きかけたおかげでやっと人間が住めるほど乾いてきました。彼ら四つの風は、悪霊イエイの邪悪な力をも追い払い、こうしてこの新しい世界は美しい姿に変わりました。だから、エツイディ・ビキスが唱いかけたのはこの首領に対してであり、風を呼び集め、患者を脅かす悪の影響力を吹き飛ばしてくれるように祈願したわけです。

こうして儀式は四日四晩続きましたが、吟唱祈願、呪物展示、ガラガラや笛のような楽器の伴奏、それにツイン・ブーウニ（これはホピ族の振り回す雷の祈願棒に似ています）を振り回すこと、等が行われたのです。エツイディ・ビキスの報酬は6ドルに相当する、大きな馬一頭でした。

この次にやってきたシャーマンの名はホスティン・ビカン。薬草の根の生のままのものと液体に浸したものを、両方を患者に飲ませました。シロバナヨウシュチョウセンアサガオ²⁴⁾の根は

三回、日の出、正午、日の入り時に与えられたのです。一回分はつい先頃乾燥させたばかりの根で半オンス（約 15 グラム）以下の分量です。これが噛まれ飲み込まれました。毎回この薬のすぐあとに、約 6 インチ（15 センチ）の長さで親指くらいの厚さのゴールデン・アレキサンダー²⁵⁾の茎が一本与えられました。患者は噛んでその液を飲みましたが、繊維は残します。歌による祈願の合間に夜昼となく患者は、一度に半パイント（約 0.3 リットル）を越えない量の水様薬を飲まされました。薬草を溶かした水様薬にはそれぞれ次のようなものがあります。アゼ・クロヒ（笑い薬）、アゼ・ビニ（悪口薬、あるいは怪談薬）、サフエホイツォ（水様薬の大酋長）で、これらはみな、沼地に育つ薬草であり、夜陰に咲く種類だと思います。ホスティン・ビカンの儀式は一昼夜かかりました。報酬は馬一頭、50 ドルです。

最後にやってきた最も強大なシャーマンがクマでした。患者が所属する一門の酋長ですが、家は私たちの峡谷から南西に約 30 マイルほど行ったところにあります。

クマの祈願はホスジョクン（殺し屋）とホスジェ・イエルティ（話し手）、すなわちツホリイの守護神に向けられたものです。しかし、これらの祈りは直接には半白の家に棲んでいる、精霊群イエィに語りかけられたものであり、「殺し屋」には殺しを手控えてもらい、「話し手」には口を慎んでくれるように熟慮を請うというものです。北の方には謎めいた場所があることはご存じでしょう。その世界は地の底から天頂まで延びていて地平線はありません。それは様々な色彩を持つ垂直の階層からなる国であり、各層は「下から上へ」と向かっています。一つの層は、イエィ一人の住居に相当しますが、その半分はすぐ下の層、半分はすぐ上の層に跨っているそうです^{原注2)}。

スエット・ハウスの外側は、色つきの砂で装飾されます。^{シンギング・ハウス}吟唱用の家が準備され、^{サンド・ヒクチャーズ}砂絵が祭壇としてこの家の床に作られます。それから、仮面を付けた舞踊劇が始まるのです。このクマの儀式は 5 日 5 晩続きました。毎朝、日の出時に患者はスエット・ハウスに一回 10 分づつ 20 分寝かされたのです。昼間は何も重要なことは行われませんでした。日の入りから夜明けまで仮面の踊り手は、吟唱用の家の前で踊り、この間、中では呪医たちが祈り、砂絵を作り、その前に、またその上に崇拜の対象たる呪物を置いたのです。

報酬としてクマは立派な馬一頭と仔馬を受け取りました。これは 100 ドルに相当します。

これらの報酬とは別に、羊が何頭か肉を供するために殺され、またその他の食料がシャーマンとその補佐、踊り手、それにこの宗教的行事が進行しているあいだ、周囲に集まった多くの見物人をもてなすために購入されました。これらのものの出費に関しては患者の親戚が援助をしています。

儀式が行われて 3 週間すぎましたが、この間おこりはやまず、毎日続いていたのです。この 3 週間目の終わり、患者は「地下に続く階段が見える」ことを告白しました。

友人たちに腹帯を締められ、ちょうど遺骨を拾った骨袋のように毛布でグルグル巻きに巻か

れたまま馬の鞍に乘せられ、患者はここまで運ばれてきました。私たちは彼の体を羊毛室におろしましたが、これが四日前のことです。^{かんこう}甘永²⁶⁾はなかったので、青い粒のままですが気前よく一回 30 粒ほど与えました。次の朝、ひまし油を相当量飲ませ、それから毎日四回、キニーネを 30 粒投与しました。二日前、おこりは消えました。今朝、彼は友人と一緒に家に向かいました。ここを発つとき宝石商のジョンは、ずいぶんよくなったとわたしに言いました。明日の晩は妻に対して夫としての義務を果たせると考えていたのです。

A.M. スティーブン²⁷⁾

Ⅵ-3 ハヴァスパイ族²⁸⁾の往時

ランソーは七才の快楽主義者である。^{キャタラクト・キャニオン}大滝峡谷²⁹⁾の夜明けの時刻は遅いが、アリゾナは春の夜でも冷え込みは厳しく、それに柔らかい手織の寝具、ヒマラヤ杉の樹皮から作った^{むしろ}蓆や兎の毛の毛布などには一晩の体温がこもっているのだからますます寢床から離れることは難しい。しかし「ランソーや」と祖父のシンニエラが囁く。「さあ起きるんだ。朝日に向かって一っ走りしてくれば大きく強くなれるよ。お爺いちゃんの言うことをよく聞くんだ。松明を持ってきて自分の肘と手首を暖めなさい。そうすればお爺いちゃんのようにリュウマチで苦しむことはないよ。あゝ、そうそう。こちらに振り向くときに松明をうしろに放り投げろ。もう一度こちらを向くときにそれを拾い上げれば、おまえの記憶力はよくなるよ。狩りに行って鹿殺しの呪文を忘れてもすぐ思い出せるからね」

ランソーは川端の家を出て細いハコヤナギの森の中をのろのろと歩くが競馬コースに入ると、その深い砂の上では根気よく小走りを続ける。競馬コース——そこは全速力で猛然と駆け抜ける場所だ。兄や姉たちと一緒に父の裸馬の背にしがみついて。今は全力で走る必要などどこにもない。徒競走は踊りの後に行われる。それも秋の取入れが始まるまで待たなくちゃならない。踊りの時だ——と考えると思わず鼻歌が出た。「そうだ。ボクはなんでも知っているぞ。今度はボクも踊るんだ」

ランソーが家に帰るころには空は明るくなっている。ハヴァスパイ族の人ならみな動き出す時分である。ツンと鼻をつく煙が柳の林の上から漂い始める。聳え立つ岩を背にして静かな空気の中に留まる、えもいえない煙の層。上の高台にある冬場の家にまで延び広がるその岩壁。彼の家はむこうの開墾地の中にある。雨の日に備えて柳の葉で葺いた丸屋根。枝で補強したその泥の屋根は、真昼の日光を避けるために箱型の影を地面に落とす。ついでに言えば、砂の堆積物で出来上がった、この^{ハット}帽子の小屋は、隆起した川岸の中に埋め込まれて、その一部になっているのである。

あらゆる客人を歓待しようと口を開けて日がな一日そこに立っている、酌めども尽きない粘

土の鍋の中でグツグツ煮込まれ沸騰している朝食の香をランソーは嗅ぐ。しかし、寒さで食欲を刺激されてはいても、ドサクサに紛れてこの食事を横合からかっばらってやろう、などという気はサラサラ起きない。そう、こんな無礼なこそ泥に対して与えられる、あの強い非難と嘲笑に耐えるには勇気が必要だったから。帽子の妻、円ラウンド・ワン（まどか）が家族の者を呼ぶときまで待った方が得策である。挽き割のトウモロコシとビッグホーンシチュー³⁰⁾の肉汁、皮で結び残り火で焼いたコーンミールのパン、甘いメスカル³¹⁾のジュース、それに遥か下の峡谷の洞穴から取った塩を、彼女が甥のランソーに分ける順番は一番最後というわけではない。そこで彼は鍋と籠の周りに並んでいる年長者のところへ近寄って、大好きな叔父、狐フォックスに頼みこんで、そばから細い柳の枝を尖がらした一本箸を伸ばして旨い部分を釣り上げるのを大目にみてもらったものだ。そうこうするうち、角形の柄杓に溢れんばかりの肉汁を味わう番が回ってきたのである。「さあ」とシンニエラ老人は言った。「藪を焼き払ってわしらの畑ができた。今日は種を植え付ける日だぞ」そこで家族全員がぞろぞろと出かけたのである。男と子どもは馬に乗り、女たちは揺り板に紐で結び付けた赤ん坊を腕に抱いてそばをトボトボと歩いた。祖父の背中にしっかりと捕まっているランソーの体は馬がゆるい駆け足になると、大きく揺れた。馬から降りたらいよいよ仕事が始まることを彼は知っていた。自分の弓矢で撃ち落とした獲物——ほんのちっぽけな奴だったが——の次に、こんどの食料は一家の貯蔵庫をほとんど一杯にするほどのものになるだろう。昨日彼はこれから先の作物の出来、不出来を賭けてみんながシンニエラ³²⁾をやるのを見ていたから、今日植え付けが始まるだろうと想像していたのである。

広い野原を馬で通り抜けながら、一つの堰から畑のある地層まであちこちに運河が、ちょうど破れた翼を伸ばしたように広がっている様子、さらにまた修理を要する灌漑などがそこそこに点在しているのを見ているうち、やがて一家はトウモロコシ畑にやってきた。この畑はみなシンニエラのものであるが、かつてはその父のものであり、祖父のものだった。いつの日かランソーのものになるだろう。

馬ロッキイ・スロープを石坂の麓に放牧しておいて皆は崖の足元の割れ目に燕の巣のように張り付いている貯蔵庫——恐ろしい洪水が届かないように高い位置に設けたのだ——まで登った。トウモロコシの種を取り出して、シンニエラは畑に膝を着き、先の尖った棒で地面を掻き穴を一つ開けた。それから彼は祈った。「伸びよ、トウモロコシ。茎が太くなれば背は伸びる。あそこの古いトウモロコシのように高く大きくなってくれ！」さらに穴にいくつかの粒を落としたあと、数個の粒を噛んで「トウモロコシ」に見立てた峡谷の壁の中の大きな二つの白い岩に向けてピュッと吐いた。それから少し前へ二歩進んで再び穴を掘ろうとして膝を着いた。ランソーはさっき見た通りのことを行った。まず、穀粒を少々掴んで、すばやくその穴に蒔く。それから次は峡谷に向かって……。

こうしてこの峡谷に光と熱を降り注いでいる朝日の下で彼らは畝から畝へ次々と種を植え付

けていったのである。向こうの巨大なハコヤナギの落とす深い木陰の中で祖父が小さな弟——まだ名前も就いていないヨチヨチ歩きの赤ん坊だ——と遊んでいるのが見えた。近くの藪から鳥の囀りが聞こえて来たので、ランソーはどこかに置き忘れた矢を探した。「うん」シンニエラは弟をからかっている。「あの鳥はおまえに向かってこういっているんだよ。『おまえは男の子じゃない。わたしを殺す矢も持たない奴は女の子だ』」祖父はなんでも知っている。立派な弓矢を幾つかこしらえたし、冬の夜には長い話をしてくれた。「今度の冬は」ランソーは思った。「うちのもう一つの家がある、あのヒマラヤ杉の谷間の雪の中で、ボクは兎を追いかけるんだ。今はここで狩りをしなくちゃいけないが」

藪が男の子を育ててきたのだ。ランソーもこの藪に育てられた中の一人だ。撃ち落とすべき鳥がいるし、攻撃して苛める犬もいる。細心の注意を払って避けなければならない陥し穴がある。水を遣り、手足を伸ばさせ競走させる馬がいる。みんなは峡谷を駆け降りてコヨーテの家のところにやってくると、例の好奇心旺盛なナヴァホ族の客人がじっとこちらを眺めていた。登り降りする崖とか、見物ができる革鞆し、弓矢の標的になる平べったいサボテンが続いておれば、また友人に頼んで恵んでもらう食物があれば、それにあちこちに親戚がいれば、朝というものは短いものだ。殊に妻を貰いにワラパイ族³³⁾にまで旅をして、柳の木の中で待ち伏せする真似とか、水面下に全身を浸して隠れていたときにシッカリ抱き合ったという、「冷たい」小川のことなどを語る親類の一人義足の話を書くときは……

II

もうもうたる埃の渦の中でパナミーダは堤防から馬を追いついて川原へ下ろした。腹の高さまでしかない冷たい水の流れを馬は首を伸ばし喉に受けながら涼んでいた。ブラブラさせたパナミーダの足首の周りを水は渦を巻くように通り過ぎた。ここは午後の暑さから逃れてホッと一息つく場所だ。身を屈めると上流が見える。ちょうど柳のアーチ屋根の下で女たちが水籠³⁴⁾で水を汲んでいた。人は彼のことを^{フックス}狐と呼ぶ。なるほど狐に似ている。だけど結婚以来、パナミーダと呼ばれ始めたことを知らないこの男は何物だろうか？妻はこの三頭が左利きの馬になったことを知っているだろうか？彼は左利きに大きな毛布一枚、ホピ族のシャツ一枚、それと大量の乾燥肉を贈ったが、それはすべて妻のギャサウインガのためにほかならなかった。妻の父親の家に初めて暮し³⁵⁾、そこで働いたときのことだが。「息子が生まれたら、自家の畑に俺は自分の家を建てよう。シンニエラは俺にも土地を分けてくれるだろう」と彼は思った。彼は間違いなく息子が誕生すると確信していた。つい昨日、帽子の娘が紐で人形を編んだが、それが男の子に似ていたからだ。

柳の茂みの陰になって見えない、向こうの踊り場から甲高い笑い声が聞こえてきた。女たちが鞭打ちゲームをし、サイコロを転がして遊んでいるのである。彼は突然声を上げて笑った。

大きな歌が聞こえてくるが、あれはスオルン・リスト腫れた手首の声だ。

ゲリ・・・スティックス
わたしは合い札を
全部取り返したい。
もう死んでしまいそうなの³⁶⁾

「あいつは賭に勝ったためしがないからな」とパナミーダは思った。「そうだ、あの女たちは今晚の踊りに備えて料理を作らなくちゃなんのだが。俺もあとで競馬大会に出よう」

パナミーダは馬を放牧しておいて自分は川岸をブラブラ下ってトゥ・・・ワイフズ スエット・ロッジ二人妻の蒸し風呂まで来ると、腰布だけになった男が十人以上、川原の砂の周囲にたむろしていた。連中はたいい真夏の暑さを避けて仲間と四方山話をしにここにやってきているのである。中に入る順番を待っている間にコーン スイーフ黍(キビ)泥棒と呼ばれている老人が気だるそうな調子で若い頃のことを語った。「……わしらはイワシロヤギの集団にぶつかってしもうた。その中には雄ヤギも何頭か混じっていたんだな。わしがそのうちの一頭を撃ち倒したが、残りは逃げた。この手負いのヤギも崖から跳び降りて狭い岩棚を伝って逃げたんだ。わしと帽子の父親と二人で岩から岩へ跳び移りながら後を追いかけると、とうとうこの岩棚の行き止まりまで来たところで奴は立ち止まった。それからクルリと向きを変えるや、頭を低く横に構えてこちらに突進して来たんだ。わしは追い詰められて岩にピッタリ身をくっつけた。帽子の父もすぐ横にいる。もう逃げるだけの隙間は全然ない。この雄ヤギが体当たりしたのは帽子の親父の方だった。角で撥ね跳ばされて岩から落ちてしもうたんだ。この岩は非常に高い所にある。ヤギは立ったままでジッとしている。上から誰かが銃で撃った。弾は命中して奴もまたまっさかさまに転げ落ちた。翌日わしらは山道を辿り、溪谷で死体を見つけた。みんなで抱え上げ穴を掘って埋めた。火葬にする時間がなかったからな」パナミーダは帽子の父親の名前がなかなか思い出せなかった。死んでしまってから誰もその名を口にすることがなくなったからである。

誰かが焼き立ての石を何個か小さな丸屋根型の小屋の中に運んだ。パナミーダは他の三人に続いて中に入った。四つあるスエット「汗」の一つに四人づつが割り当てられるのである。彼らは木の葉の絨毯の上で体を寄せ合いうずくまった。ビッシリと木の葉を敷き詰めた小屋の内部は真っ暗である。中の温度は高く、触ったものはみな火傷するくらい熱かった。汗が目にも染み込み、背中を伝って滴り落ちて来た。毛髪は乾いて根元が焼けそうな感じがしてきた。ハァハァと吐く息が液体の炎のようで、鼻孔の縁とか喉がヒリヒリする。実に静寂である。突如、彼の隣にうずくまっていた男が歌を唱い始め、彼もこれに唱和した。その方が楽なのである。リー・グー世話役が水を一杯、岩の上に掛けるとシューッという鋭い音をたてた。蒸気がむせかえるように立ち、部屋の内部は耐え難いほどの暑さになった。両足の間の地面にピッタリと頭をつけて、まだし

も涼しげな空気を吸い込んだ。それからゆっくりと体を起こした。彼の体からはまだ湯気が立っている。筋肉という筋肉がほぐれ柔らかくなった。体感じていた痛みはどこかに消えた。清々しく、生まれ変わったような気持ちである。ハネ戸をくぐり抜けて日光の中に出ると、川岸に立ち、流れの中にザンプと身を躍らせた。浮かび上がってきて彼は大きく喘いだ。息が上がってしまうほど苦しかった。しかし皮膚はチクチクし、筋肉はブルブル震えるくらいに引き締まって気分は実に爽快だった。

パナミーダが踊り場に來たとき、もうすでに幾つも競馬が行われたところだった。自分の仔馬が速くなれるように、という歌は唱ったが、彼は自分では決して馬には乗らなかった。弟フラッグメント・オブ・ロックの岩屑フラッグメント・オブ・ロックが乗って自分はいつも賭けたものだった。父が死んだら自分が酋長になるんだから、今は威厳を示さなくちゃいけないのである。籠を編んでいるギャサウインガとその母親のそばに腰を下ろした。「ナヴァホの連中がやって来てな」とギャサウインガに囁く。「おまえにぜひと大きな毛布をもってきたんで、お返しに皮つきトウモロコシの籠をやったよ。わしも馬一頭もらったから大きい鹿革二枚とトウモロコシを少しやった」彼は客人の方へ行った。「あんた方の縄の結び目もあと一つだけになったね³⁷⁾。今晚はここで踊りがあるんだよ。今から十回眠った前、わたらの収穫と一緒に祝いたいとあんたたちが酋長殿に話を持ち出したときには、まだ11あったのにな。もうそろそろ日が暮れる。踊りの班長が柳の葉の壇に肉やパンを広げたところだ。お客さんは全部食べて下さいよ」

ナヴァホ族とホピ族が先に食べれるように彼は家族のものと一緒に後ろに引っ込んだ。女を連れてはいなかったが、これらの客人たちはここでは信頼されていた。特に暮しも楽で、よその部族の習慣にもよく通じているホピ族は。だけど男性たるもの、馬に乗ってくるはずなのに歩いてやってきたのは滑稽であった。

しかし敵方である、あのヤヴァパイ³⁸⁾の奴らときたら。パナミーダは彼らのこともよく知っていた。彼はこの前の秋のことを思い出した。あのとき梟が「南の方から誰かやってくるぞ。ホー、ホー」と警告したのだ。すると本当に早晩、崖を降りて峡谷に入り込んで来る賊がいた。女や子供は崖を攀じ登って身を潜めよ、という警報が出たことを思い出した。峡谷での一日がかりの追跡、こ競り合い、それから再び敵は逃走した。そのうちにヤヴァパイの奴らは疲れてしまい小高い丘に避難した。「よし」酋長マナカダヤは言った。「わたしもみな腹を空かしている。誰か馬に乗って引き返し食べ物を持って来い。」腹拵えが出来ると勇気が湧いてくる。二人が分厚い鹿皮を持ち出して弓に吊し体の前に構えた。矢の束を運んで前屈みになりながらもパナミーダも先ほど他の兵士に続いてこの隠れ場で休んでいた。彼らが勇敢に丘を登っていくと、ヤヴァパイの放った矢が雨あられと降り注いだが、パタパタと鹿皮に当たるだけでまるで害がなかった。山頂付近に近づいたとき、鹿皮を抱えていたワサクイヴァーマに矢が当たった。「腕の力がなくなってきたから、もうこれ以上は持ちこたえられない。引き返した方がよい」攻

撃が再開された。ヤヴァパイは矢が尽きてしまい、岩を落し始めた。パナミーダは以前自分が使った強力無比の飛び道具のことを思いだしてニヤリとした。バネを利かして突如としてヒョーと石を発したところ、無警戒の敵はすっ飛んで坂道を転げ落ちてあっさりとケリがついた。そうだ、もう一度あんな見事な攻撃を見せれば父親が死ぬ前に俺は酋長と呼ばれるかもしれない。ヤヴァパイは夜陰に乗じて逃げた。「まったく」と彼は悲しげに考える。「奴らは戦争が好きだ。いつ来ても何人か味方を殺しては引き上げて行く……」

月光が踊りの続く開墾地全体を照らし出していた。東側の崖が空を背景に黒くくっきりと聳えている。歌声が熄んだ。柱を囲んでいた集団がバラけた。見物している相当数の家族の中でシンニエラが立ち上がった。「わが大地よ、お聞き下され。われらを永遠に生かしたまえ。われは健やかな命を常に望むなり。大地よ、わが言葉をお聞きあれ！」彼は岩や大地、そして川に祈った。踊りの合間にどんな酋長でも話すことであるが、若者に勤勉を説き、立派に踊って諍いを起こさないようにと諭した。

部族きっての歌い手であるパイヤーが元の位置に戻り柱に向かい合った。太鼓を抱えたパナミーダは一步進み出てそのそばに並んだ。踊り手たちがさっとこの二人に加わり、大きな環が出来る。肩が組まれ手が繋がる。パイヤーが太鼓の音に合わせて唱い始めた。

彼の国は風も爽やかなり
乙女子ら環をなして踊る³⁹⁾

歌い手は遠い国に旅して、人々の踊りをいま目の辺りにしている、そんな夢を見ているところなのである。周囲の人々が繰り返しの部分を和した。彼らは立って数分間唱った。それからパイヤーの合図とともに全員の合唱が始まった。皆は左廻りに短く斜めに足を引きずるようにステップしていった。ゆっくりと環は動いた。祭りの衣裳を着込んだ50人の男と、音響器具を手を持った少女たち。繰り返し、繰り返し、彼らは同じ歌を唱ったが、リーダーが最初の位置に戻ったとき、その歌は終わった。それからおよそ1分近くたったが、まだ誰も帰るものはいない。「ニドホァンウィ」と何人かが催促した。そこでパイヤーはお得意の曲を唱い始めた。

ニドホァンウィ、われはすなり、
われ、その名を名乗るもの。
乙女子ら、わがもとに立てり。⁴⁰⁾

やがて全員がその歌を唱っていた。環も再び動き始めた。興奮が高まると老人たちは大声で営めそやしはげました。娘たちは人ごみを押し分けて各々好きな相手の側まで行った。いやが

っていたナヴァホの連中も無理やり環の中に引きずり込まれた。誰かが自分の腿を押しているのにパナミーダは気が付いた。弟の子のランソーである。「伯父さんも来てよ」そう言いながら、子どもはパナミーダが入る場所を空けた。

また別の歌が唱われて、休憩となった。これでやっと解放されたナヴァホは相手方にちょっと御礼を言っていた。と、突如、夜の闇の中から一人の奇怪な人物が飛び込んで来た。

白い仮面、横縞の入墨の入った体、手にはしなやかなユッカの小枝を鞭代わりに持っている。この男、踊りに加わらない怠け者を鞭で打ち据えながら駆け回っている。大人たちは笑い転げる。子供らは怖がって逃げ惑う。犬は吠えた。もういっぺん踊りが始まった。パナミーダの声は嘎れてきた。まだ夜明けにはだいぶ間がある。しかも今日は三日間の踊りが始まったばかりなのだ。

III

シンニエラはなかなかの懐疑主義者である。彼は小屋の中に悠然と腰を下ろし、病気になった妹の孫のかたわらで灯火に照らされている^{シャーマン}祈祷師、^{サック}大袋の姿をじっと見ていた。この家のものは勝手に「この祈祷師が強くなりますように」と叫ぶがよいワ。ワシは待つだけだ、もしこの子が死んだら無能力者は殺さねばならん。祈祷師は膝をついたまま子どもの上に覆いかぶさり、頭を一方に傾け体を揺すりながら歌を唱っている。左手を閉じた両目の上で固く握りしめ、もう一方の手でガラガラを振り続けている。彼は一旦動きを止め、口を開けたままで背筋をピンと伸ばした。彼の親しい精霊がその体の中から抜け出て病魔、すなわち病気を引き起こす悪霊を探しにいけるようにするためである。それから彼は起き上がって暗闇の中に出ていった。シンニエラの耳には祈祷師の靈魂がもと通り、体に戻るときのシーとかヒューとかいう音が聞こえた。祈祷師は再び家の中に入り、祈願の歌を続けた。唇を少年の額に押し付けているのは靈魂が病気を探しに行けるようにするためだ。やがて彼は大きく咳込むと同時に靈魂を吸い戻し、ペッと掌の上に吐き出して勝ち誇るようにその中味を見せたが、それは白く小さな糸のような虫だった。「わたしには手ごわい相手でしたが、ともかく病気はすべて取り出しました。もう何も残っていませんよ」結構です、と子どもの父親は大袋に大きな毛布一枚を与えたが、シンニエラの決心は動かない。とにかく待つて見ることだ。

踏み固められた雪の上を歩きながらヒマラヤ杉の森の家に戻る途中、彼は物思いに耽けていた。「大袋は若い。あまり能力はないかも知れない。おそらく霊力が弱いのだろう。しかしわたしはこの方面には詳しくないからな。あそこにパジオガ、^{マン・スナッチャー}人さらい星が出ているし、それにと時には亡霊も出る。わしもまた祈ることにしよう『お日さまよ、わが同胞よ。わしのために何かよいことをして下され。わしを永遠に今の姿のままに保ってください。』」……最近彼の耳はときどき耳鳴りがするようになった。亡霊が彼に囁やくのである。突然、彼は叫んだ。「フ

ウウウよ、駄目だ。おまえはそういうが、わしはまだ死にはせんぞ！」

秋に溪谷を出て松笠と野生の種をタツプリ集めたのは正解だった。この冬、雪が太腿^{ふともも}までの深さに積もったからだ。身を切るような寒さで人間も鳥も凍えそうであった。薪にする地面の木も雪に覆われている。しかしこの深い雪のため獲物になる鹿やカモシカはすぐに疲れて動けなくなったし、おまけにこの高原では飲み水に不足することはけっしてないだろう。雪を被った木々は遠い昔、彼の父が雪の中で道に迷っていたナヴァホの女を見つけて連れ帰り、妻にしたときのことを思い出させた。彼はまた他のナヴァホ族を思い出した。戦い相手となったナヴァホ。盗んだ馬の持ち主のナヴァホ。それからホピ族との交易に出かけたその途中、彼から品物を奪ったナヴァホの男たち。東のホピの村里には何度も出かけた。そこで以前は敵であったナヴァホもまた交易に来ていたのだ。贈物の交換、夜更けまで話し合っ^てて友情を新たにしたこと、鹿革と鹿の角で作った柄杓を毛布数枚と交換し、それから馬に荷を積んで乾燥した荒野を越え、故郷の溪谷まで2週間がかりで旅したことなど。あそこの荒野で血続きの兄弟でもあるワラパイ族が西から来るのを待ったことがあった。あるいは、もし来なかった場合はホピ族に織物を運び、その里で交易をした。一度、彼はコロラド川の低地にいるモハブ族の領地にまで入り込み、その厚かましさに連中をあきれさせてしまった。だけどそのお蔭で滞在を許され、平和に交易が出来たのだった。

どこの国でも彼はよく知られていた。そんなわけでみんなは彼を酋長と呼んだのである。彼は自力で酋長になったのだ。なるほど祖父も酋長だったし、その父もそのまた父もそうだった。しかし彼自身の父親はけっして酋長にはなれなかった。誰も彼をそう呼ぼうとしないほどロクデナシだったのである。これからわしが死んだら、と彼は考える。上の息子二人が酋長職を分け合うだろう、畑と同じようにな。この二人には酋長相応の話し方を教えてある。

身を屈め、半ドーム型の小屋の揚げ戸を持ち上げたとき、光と暖気がどっと溢れて来るのを彼は感じた。これがわが家であり、この人々が自分の家族なのだ。帰るべき家があることは常に喜ばしいことだ。中央の火の周囲に寝そべっている人たちが、急に朗らかな会話を中断して彼に挨拶した。向こうの方での暗い軒下で寝たふりをしている子どもたちが何か冗談を言ってクスクス笑っている声が聞こえる。「ワラパイがやって来ました。この春にはパイユートに^{グランド・キャニオン}大峽谷越えの大攻勢を仕掛けるそうで、うちの若いものに加勢を要請しに来たのです。パナミーダは行きたいようですよ」という話である。

「パナミーダはいますぐにも奴らと戦うことになる。家にいた方がよい」

「パナミーダ、どこかの綺麗なワラパイの娘に『トカゲの丸焼き^{ロースト・ビーフ}をどうぞ』⁴¹⁾なんて言われるかもしれないワヨ」と義妹のグレデヴァが口の重いワラパイ族の物真似をすると、みんなはやはりトカゲを食べる隣族の風習を思い出してドッと笑い声を上げた。シンニエラは灯火に照らされたいくつかの顔を見ながら眠そうな微笑を漏らした。そうだ、みんなわしの家族なんだ。

すぐ傍らでランソーが「お爺いちゃん、一つだけでいいからお話してよ」というのが聴こえる。「今日はイヤとは言わないでね。今は冬だから蛇はべつに騒がないでしょ」シンニエラは暗がり寝ころんで耳を澄ましている子供たちのところにドッカと腰を下ろした。「狼とコヨーテがはるか西の海の近くに住んでいました。狼はコヨーテに言いました。『この地方には獲物がいない。鹿もカモシカもいない。食べるものといえばドブ鼠だけだ。わしらが殺せるものはそれだけだ。わしらが食べる肉は鼠しかないのだ。君が海の中に潜って、あの深い海の底まで行ってきたらどうかと思うんだがね』海の底にはヘラジカがたくさん住んでいたんだね。コヨーテはやってみた。海水の近くまで来て頭を下げるだけで怖くなってしまった。『水の中に潜るのは怖いよ。君が行ってよ』狼は言った。『ヨシ、僕が潜って狩りをしてくる。大きなヘラジカを狩って、すぐに追い立ててくるよ。四回眠ったら、また出て来るからね』。 . . .」

レスリー・スピア⁴²⁾

原注

- 1) 本稿はスチュアート・キューリン氏によって寄稿された。
- 2) ワシントン・マッシュー博士が数年前フォート・ディファイアンスで観察した儀式は「半赤の家」に棲むイエィたちに語りかけられたものであるが、しかし筆者はその祭りの起源と、ここの「半白の家」のイエィらに関するそれは同一であり、式典も歌も非常に似通っている、との印象を受けている。

訳注

- 1) タルサ Tulsa タルサ族は北米大陸南東部のアラバマ、ジョージアに住んだクリーク・インディアンの一部族。クリーク・インディアンは言語学的にはマスコギ語族に属する（クリーク・セミノール語）。16世紀には部族連合を作っていたが、この地域には入江（creek）が非常に多いところから1700年代にはじめて彼らに接した白人はこれをクリーク連合体（Creek Confederacy）と称し、そのメンバーをクリークと呼んだ。当時の白人の観察によれば、その組織はイロクォイ部族連合に次いで強力なもので、戦争が起これば必ず援助しあうほか、儀式を協同で行っていた（祖父江孝男「クリーク」『文化人類学事典』石川栄吉他、弘文堂、昭和62年、232頁）。なお、タルサおよびマスコギは現在オクラホマ州北東部アーカンソー河畔の都市の名として残っている。
- 2) マスコギ Muskogee 本訳注1) 参照。
- 3) ラクロス lacrosse 語源はフランス語の la crosse。ヘルメットやグラブをつけて行われるスピーディな球技で、10人ずつ（女子は12人ずつ）の2チームで得点を争う。ネットつきのスティック（crosse）で相手のゴールにシュートする。もとアメリカ・インディアンから起こったものでカナダ、米国、オーストラリア、英国などで行われている。
- 4) バイソン Bison バイソン（偶蹄類ウシ科バイソン属の動物）の総称。アメリカ・バイソンとヨーロッパ・バイソンの2種がある。バッファロー（buffalo）はアメリカにおけるバイソンの俗称。

- 5) 大きな兎。the Rabbit 先住民の神話（創造譚）の中には兎を世界の創始者とするものが多い。アルゴンキン語族、特にメノミニ族の神話に登場する大きな兎 Manabus（メネブス）はよく知られている。拙訳「アメリカ先住民の生活と宗教」『日米文学の中の「生」と「死」——アニミズムの復権』（近代文芸社、1998）第二部、第三章、119—133、もしくは拙論「北米インディアンの生活（2）—23部族の伝承と生活」『富山大学人文学部紀要』（第29号、1998、8月）PP.13—71を参照。
- 6) トウモロコシの収穫 until after... the corn had been harvested このタルサ、もしくはクリーク族では農耕（トウモロコシ、豆など）と狩猟（鹿、魚）を行った（祖父江孝男夫「クリーク」『文化人類学事典』232頁）。
- 7) クリーク連合体。本訳注1）参照。
- 8) ヌマスギの呼吸根 cypress knee 合衆国南部およびメキシコの湿地や沼地に見受けられるヌマスギ pond cypress、もしくは落羽松 bald cypress（学名：Taxodium Distichum）の根から水面上に出る呼吸根。柔らかいスポンジ状の繊維からできており、呼吸器官として根全体に酸素を供給する機能を持つが、同時にまた、100—150フィートの高さにも達する幹を支え、固定する‘頼みの綱’として機能しているとも考えられている。
- 9) デ・ソート De Soto, Hernando or Fernando（1500?—42）スペインの探検家。1541年ミシシッピ河に達した。
- 10) ジョン・R・スワントン John R. Swanton 生没年不詳。民族学者。スミソニアン・インスティテュートアメリカ少数民族局勤務。原著の分担執筆者。
論文：“Early History of the Creek Indians and Their Neighbors”（*Bureau American Ethnology*, 1922?）がある
- 11) アパッチ Apache 南西インディアンの一部族で、言語学的にはアサバスカ語族のなかのアパッチ語派に属す。ズニ語で敵をさす apachu からその名が生まれた。先史時代にナヴァホと共に北から南下してきたと考えられ、次の諸族に分かれる。①東部アパッチ（Eastern Apache）：ヒカリヤ（Hicarilla ニューメキシコ、コロラド）、メスカレロ（Mescalero ニューメキシコ）、チリカワ（Chiricahua アリゾナ、ニューメキシコ）②西部アパッチ（Western Apache）：サンカルロス（San Carlos）、トント（Tonto）その他。いずれもアリゾナに住み、はじめチリカワのみは狩猟採集を生業としていたが、他の諸族は農耕（トウモロコシ、カボチャ、豆）を生業としていた。しかし現在は、いずれも牧牛を行っている。円錐型の小屋（ヒカリヤはティピという円錐型の皮製テント）に住み、籠作りを行い、母系制で妻方居住制。早くから馬を入手したが、馬は乗用の他、食用としても珍重されてきた。かれらのなかで東部アパッチはとくに攻撃性と略奪とを持って恐れられ、チリカワの酋長ジェロニモは1866年降伏するまで米国軍隊を悩ませて勇名をとどろかせた。なお、ヒカリヤの一部は平原にいたので平原アパッチと呼ばれることもある。またカイオワ・アパッチはその言語が近いためこの名で呼ばれるが文化的にはカイオワ近く、アパッチとは別の存在である。人口は1680年に5000、1930年に6000で、現在は1万5000（祖父江「アパッチ」前掲書、17頁）。本稿におけるアパッチは地理的にいって②サンカルロスに住む西部アパッチであろう。
- 12) 日干し煉瓦 adobe 粘土を天日で乾かして作るアドビー煉瓦、日干し煉瓦。米国南西部の先住民のアドビー煉瓦家屋、塙。なお、語源はスペイン語の adobar to plaster、さらにアラビア語の attub=at-tub brick に遡る。
- 13) 白楊の木立の下 under the cotton-woods 先住民のほとんどの部族ではハコヤナギが聖樹として崇められている。例えばクロウ族、ダコタ族などの平原インディアンではこの木を切り倒し、

一年後にサンダンス（太陽踊り）の中心の柱として使用する（阿部珠理『アメリカ先住民の精神世界』日本放送協会、1995、pp.130-150、さらに前掲の拙著『日米文学の中の「生」と「死」——アニミズムの復権』の第二部、第一章「煙管運び——クロウ族の戦士」pp.85-106、およびp.186の訳注「2」を参照）。

- 14) 原文（英訳）は以下の通り。

When the earth was made, / When the sky was made, / Where the head of the black earth lies, / Where the head of the sky lies, / Where the heads of them meet, / Black Thunder, Black Gan, facing each other with life stepped out. / Black Gan with his dance spoke four times.

- 15) 原文（英訳）は以下の通り。

Estsunnadlehe / From her house of white cloud / Living white shell, her chief, / It echoes with me / Estsunnadlehe / Long and fortune life, her chief, / It echoes with me.

- 16) ピマ族 Pima 「南西インディアンの一部族。アリゾナのヒラ川（Gila River）流域に住む。言語学的にはパパゴと共にユト・アステカ語派のなかの南ユト・アステカ語派に属す。ピマとはかれらの言葉で“No”を意味するものだが、初期の宣教師がかれらの部族名を尋ねたときにこの答えを聞き、これが自称であると誤解して、そのままかれらの名称となった。生業は農耕で、トウモロコシ、カボチャ、豆であったが、スペイン人との接触後にスイカ、小麦をも作るようになった。また女性は籠の製作を行う。宗教儀礼では収穫祭が最も重要。1600年の人口は4000で1937年には5000を越えていたが、現在も大体同数と推定される」（祖父江「ピマ」前掲『文化人類学事典』630頁）。

- 17) 白山 White Mountain とはアリゾナ州南西部の Fort Apache Indian Reservation の中にある山。なお、このあと出て来る、白川 White River, 黒川 Black River もこの中にあって州都フェニックス Phoenix の南方の塩川 Salt River が白山の麓付近で二つに分かれて北に白川、南に黒川となる。

- 18) ポンチョ poncho 元来は南米の Andes 山地のインディオが着用した一種の外套。

- 19) P. E. ゴッダード Goddard, P. E. 生没年不詳。民族学者。アメリカ自然誌博物館館長を勤めた。原著の分担執筆者。なお『アメリカ自然誌博物館会誌・人類学研究論文集』the *Anthropological Papers of the American Museums of Natural history*, Vol. XXIV. にはアパッチに関する次の二編が掲載されている。

“Myths and Tales from the San Carlos Apache. part 1”

“Myths and Tales from the White Mountain Apache. part 2”

- 20) ナヴァホ族の友人 a Navaho (Navajo) friend ナヴァホ族は「南西インディアンの一部族。言語学的にはアサバスカ語族のなかのアパッチ語派に属し、アリゾナ、ニューメキシコ、ユタ、コロラドの砂漠に住む。テワ・プエブロのことばで“大きな耕地”を意味する Navahu からその名が生まれた。……アパッチと共に北から南下して1200年前後にここに到達し、はじめは狩猟採集民で1620年代末には農耕（トウモロコシ、カボチャ、豆）を生業としていたが、1680年プエブロがスペイン人に反乱してかれらを追放したとき、スペイン人の羊を入手して牧羊が始まり現代に至っている。またこの頃に馬も手に入れた。羊毛による敷物その他の織物製作もこの頃から始まり、19世紀半ばにメキシコ人から学んだ銀細工（装身具）と並んで最も重要な収入源となった。母系制で妻方居住制、土で作った小屋（ホーガン hogan）に住む。病気治療その他の儀式の際に砂絵（sandpainting）を描くが、その種類は500種にも達する。妖術（witchcraft）もしばしば行われる。1860年代一部のものが白人部落の略奪など行ったため、婦女子を含む数

- 千人が遠路、強制的にサムナー砦に移され、4年間収容された。1680年代の人口は8000と推定されるが、1937年には4万3000で現在は16万。インディアン中最大の部族となっている」(祖父江「ナヴァホ」前掲『文化人類学事典』546頁)。
- 21) コホニーノ峡谷 Kohonino Canon (Coconino Canyon) はアリゾナ州北部の地名。Navajo Indian Reservation はこの北東部にある。
- 22) 移動中のパイユート族の分団 a band of wandering Paiutes パイユート族は「ショショニ系のアメリカ・インディアンで、北パイユートと南パイユートがあるが、両者は接触もない歴史も異なる全く別の部族である。北パイユートはオレゴン州南からネバダ北部、南パイユートはネバダ州南、ユタ州を中心として大盆地の内に領土をもつ。大盆地地方は狭小な谷とけわしい山脈が南北に幾重もの縞状に走り、夏は乾燥して暑く、冬は積雪があり寒冷である。海拔高度が高く河床部でも1000 m以上あり、山は3000 m級のものが多い。このような環境下で彼らは季節に応じて地形の高度差を利用しながら効率のよい狩猟採集生活をおくっている。食糧資源の乏しい夏は家族単位にわかれて分散し、遊動生活をおくり、またマツの実がみのる秋には山腹部にバンドの成員が集まって集落をつくり、そこで冬を越す。食糧の豊かな秋には河床部の草原でウサギやアンテロープ(カモシカ)の集団狩を行いダンスや風呂を共にして祭りを催し、多数のバンドが交流することで部落のまとまりを維持した。しかし極限に近い環境下では人口量が少なく、手から口へという厳しい生活を反映して物質文化、芸術、習慣などにはほとんどみるべきものはない。なお南パイユートはトウモロコシ、スクウォッシュ、マメ類などの栽培は知っていたが、食糧としての重要度は低かった(小山修三「パイユート」前掲『文化人類学事典』582頁)。本稿のパイユートは南パイユートであろう。
- 23) イエイ Ye ナヴァホ族の神話に登場する、地上と地下の中間のツホリイイという穴に住んでいると言われる精霊群。善霊と悪霊の二種類がいる。
- 24) シロバナヨウシュチョウセンアサガオ Jamestown weed, Jimsonweed, apple of Peru, stinkweed ともいう。アジア原産ナス科チョウセンアサガオ属の植物の総称。
- 25) ゴールデン・アレクサンダー Golden Alexander 派手な金色の花をつけるセリ科の多年草
- 26) 甘汞 calomel 塩化第一水銀のこと。下剤、電極などに用いる。
- 27) A.M. スティーブン A.M. Stephen 生没年不詳。ホピ族およびナヴァホ族と生活を共にした。ホピ族の儀式に関して以下の雑誌に論文が掲載されている。
American Anthropologist, vol. V; *Journal American Folklore*, vol V, Vi
- 28) ハヴァスパイ Havasupai 「大盆地地方インディアンの一部族。アリゾナに住み、言語学的にはユーマ語族パイ語派に属し、言語学的・文化的にワラパイ*にきわめて近く、ワラパイから分かれて成立した部族と考えられている。部族名は“青い水のほとりの人々”の意味の現地語から生まれた。1680年における人口は300と推定されるが、現在は約200。狩猟(ウサギ、トカゲ、イナゴなど)と採集(植物の種子、木の根、堅果)を生業とし、木の枝などで作った小屋に住む。妻方居住婚(祖父江「ハヴァスパイ」)前掲『文化人類学大事典』582頁)。
- 29) 大滝峡谷 Cataract Canyon アリゾナ州北部グランド・キャニオン国立公園 Grand Canyon National Park の中にある地名。
- 30) ビッグホーン bighorn ロッキー山脈に棲む大角をもつ野生の羊。Rocky Mountain sheep, mountain sheep ともいう。
- 31) メスカル mescal メスカル酒。リュウゼツランの発酵汁を蒸留して作ったメキシコ産の酒
- 32) シンニイ shinney, shinny ホッケー hockey を簡単にした遊戯。
- 33) ワラパイ Walapai 「大盆地インディアンに属する一部族。アリゾナに住み、言語学的にはユー

マ語族のなかのパイ語派に所属し、言語と文化の面ではハヴァスパイと最も近い関係にある。“松の木の人々”の意味をもつ Xawalapaiy から部族名が生まれた。1680 年における人口は 700 であったが、現在では約 450。狩猟（ウサギ、ネズミ、トカゲ、イナゴなどの小動物）と採集（植物の種子、木の根、堅果類）を主な生業とし、木の枝で作った小屋に住む。妻方夫方居住婚であるが、以前は妻方居住婚であったことが推定されている」（祖父江『文化人類学事典』850 頁）。なお、このあとの義足の結婚に伴う儀式めいた「試練」は、本邦『古事記』における、大国主と須勢理毘賣の「求婚説話」に似ていなくもない。

- 34) 水籠 water-baskets 先住民が水洩れを防ぐために粘土で裏打ちして使用した水汲みの籠。
- 35) 妻の父親の家に初めて暮し．．． he had gone first to live at her father's ハヴァスパイでは妻方居住婚の習慣がある。本訳注 28) 参照。
- 36) 原文（英訳）は以下の通り。
“My tally sticks : / I want them to come back ; / I am nearly dead.” なお tally stick とは、負債または支払いの額を示す刻み目を入れた棒のこと。
- 37) 「あんた方の結び目もあと一つだけになったね」 (“You have only one knot in your string now.”) 北米の先住民は暦として縄を結び、あるいは木の棒に刻みをつけて日数を数えた（本稿 183 頁 8—11 行参照）が、しかし、古典期（後 300 年）のマヤでは既に精緻な太陽暦を使用していたことが、神殿に描かれた象形文字によってわかる。
- 38) ヤヴァパイ Yavapai ハヴァスパイやワラパイと同じくアリゾナに住み、言語学的にも同じユーマ語族に属する。ハヴァスパイ、ワラパイは南のヤヴァパイ、アパッチ、さらにグランド・キャニオンを挟み北のパイユートと敵対した。
- 39) 原文（英訳）は以下の通り。
“A fresh wind in that country, / Girls dance circling.”
- 40) 原文（英訳）は以下の通り。
“Nidjanwi, I do it ; / I am the man who names himself ; / Maidens stand alongside.”
- 41) トカゲの丸焼き a roasted lizard ワラパイやハヴァスパイではトカゲを食する習慣がある。本訳注 28) および 33) 参照。
- 42) レスリー・スピア Leslie Spier 生没年不詳。ワシントン大学社会学部教授。
原著の分担執筆者。ハヴァスパイ族に関して次の論文がある。
“The Havasupai of Cataract Cañon.” (*American Museum Journal*, New York, December, 1918) pp. 636—645.

付記：本稿は「北米インディアンの生活 (2) —— 23 部族の伝承と習慣 ——」『富山大学人文学部紀要』第 29 号（1998 年、8 月）の続編である。
なお、文献は最終稿にまとめて掲載する予定。